第Ⅲ章　遺　跡

1　遺跡の立地と地形

遺跡の立地　本調査地は奈良盆地の南東に広がる竜門山地の北西縁辺部に位置し、調査地東側には、竜門山地から北西に延びる尾根の末端である香具山がある。香具山は耳成山・畝傍山とともに大和三山と称されるが、耳成山・畝傍山が火山性であるのに対して、香具山だけは閃緑岩・斑糲岩といった硬岩石からなる残丘である。また、香具山と調査地の間には米川に向けて北流する中ノ川があり、調査地は中ノ川左岸の平坦な沖積地に位置する。

奈良盆地南東部を流れる河川は、基本的に北西方向の盆地中央部へ向かって流れるが、直線的な箇所や直角に折れ曲がるものが多い。したがって、河道の現状は条里制地割りなどの後世の人為的な改造を受けたものと考えられている[1]。このような視点に立つと、調査地東側の中ノ川は香具山の裾を廻りつつも、ほぼ真北方位を向いて直線的に流れたのちに米川に合流するため、人為的な改造を受けた河川の一つと考えることが可能である。それより以前については不

Fig. 40　左京六条三坊周辺地形図　1:40000　正式二万分一地形図「高田」「櫻井」（共に明治四十三年）に加筆。

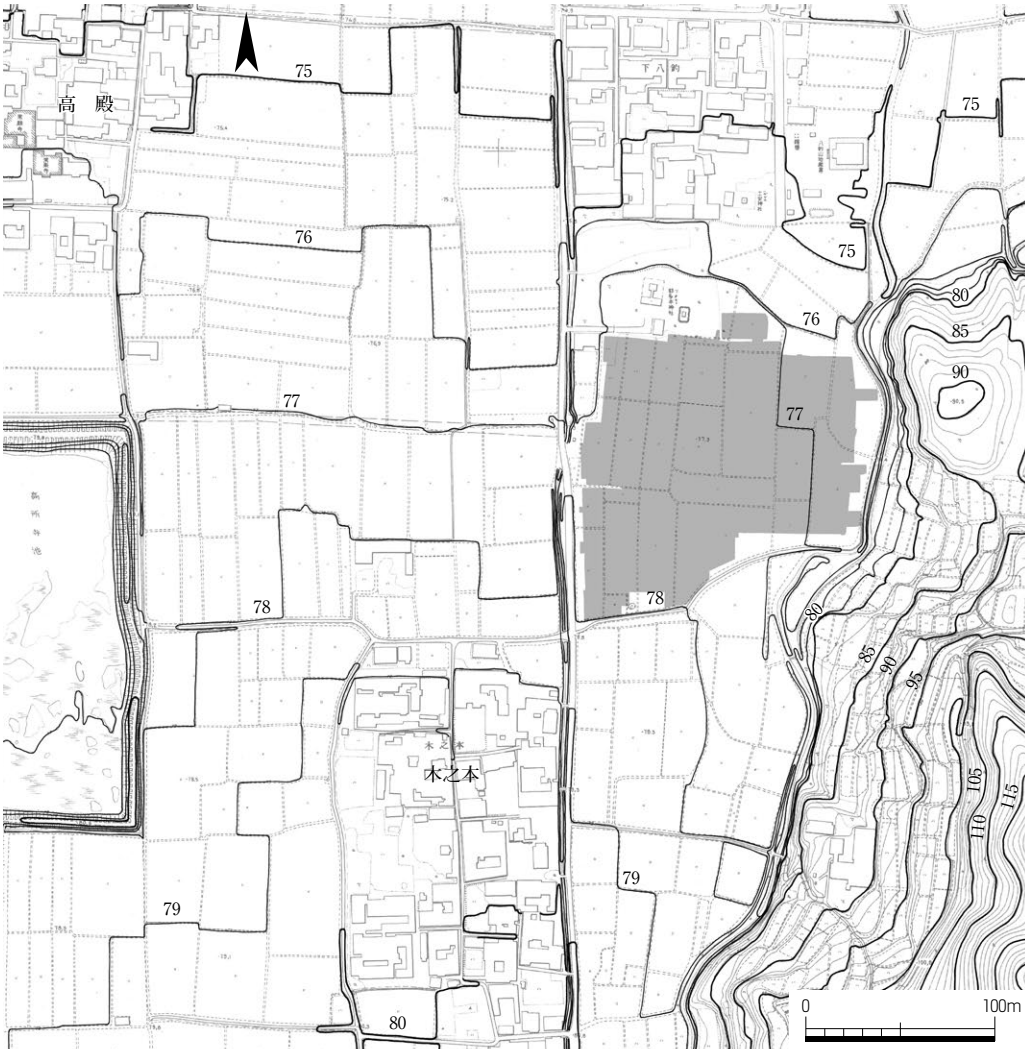


Fig. 41　**調査区と周辺の地形**　1:4000

明だが、調査区中央で確認した古墳時代以前の流路跡は、深さが明らかでないものの幅広で蛇行しながら北流しているため、旧河道にあたる可能性がある。

遺跡の地形　奈良盆地の南東部は、大半が低く平らな沖積地であり、これらの沖積は飛鳥川・米川などの竜門山地から北西へ流れる諸河川に起因する。そのため、沖積地は全体的に南東から北西方向にゆるやかに傾斜し、竜門山地に近い藤原宮跡周辺は、僅かながら扇状地性の段丘（低位段丘）として認めることができる。しかし、調査区西方にある高殿・木之本の集落から西側では、北西への傾斜が認められるのに対して、調査地では発掘前の水田の状況を見ると地形は南西から北東へ傾斜している。これは、高殿・木之本の集落は自然堤防状の微高地に立地し、調査区は中ノ川の浸食が及んでいた河道域と理解することができる。前述の古墳時代以前の旧河道だけでなく、調査区東端では中ノ川の浸食跡の一つを確認している。

以上の地形条件は、調査で確認した遺構群が平坦な沖積地の利用を意図したものと考えられる一方で、藤原京期の計画的な土地利用においては、河道により近い範囲では利用が少ないこととなって反映している。

1）丸川義広1987「自然環境と考古空間」『橿原市史』下巻。

2　遺構各説

本調査では、古墳時代から中世に至るまでの多数の遺構を検出した。これらは竪穴建物、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、溝、土坑、条坊道路など多岐にわたり、属する時代も様々である。これらの遺構の併存関係や変遷については、すでに『藤原概報16』・『同17』で報告し、また他の変遷案も出されている[1]。本報告書ではこれら既往の成果を参照しつつ、新たな検討を加えて変遷案をまとめ、第Ⅵ章１に示した。

それによると、藤原京造営期より前の時期は古墳時代と７世紀中頃の２時期に分けられ、Ⅰ期、Ⅱ期とする。造営期を含めた藤原京期についてはⅢ期とし、藤原京造営期、藤原京期前半、藤原京期後半の３時期に細分し、それぞれⅢ-Ａ期、Ⅲ-Ｂ期、Ⅲ-Ｃ期とした。これ以降の時期については、奈良時代をⅣ期とし、それ以降は平安時代前・中期と平安時代後期以降の２時期に分けて、Ⅴ期、Ⅵ期とした。本節で扱う遺構の時期は、基本的にこの変遷案にしたがうこととする。

記載にあたっては、本調査区の遺構の中核をなす時期である藤原京期（Ⅲ期）、奈良時代（Ⅳ期）の遺構に関して最初に記し、以下、７世紀中頃（Ⅱ期）、古墳時代（Ⅰ期）、平安時代前・中期（Ⅴ期）、平安時代後期以降（Ⅵ期）と進めた。最近の藤原宮や藤原京の調査成果により、藤原京造営期にも塀や建物の遺構が存在することが判明してきており、今回はその時期の遺構も藤原京期に含めた（Ⅲ-Ａ期）。また、藤原京期の遺構は前半（Ⅲ-Ｂ期）と後半（Ⅲ-Ｃ期）の変遷があるが、ともに四町占地であるために一括して記述した。井戸については、主要なものを本文にて記述し、その他のものは475頁の別表１に概要を記す。

調査区の旧状は水田であり、西から東に向かってゆるやかに傾斜する。地盤の高い調査区西半部では遺構の遺存状態は良好であるが、調査区東端の中ノ川沿いでは遺構検出面が約1.5m下がり、遺構の密度が比較的薄くなる。また、水田によっては深く地下げしている箇所もあり、遺構が失われているところも多い。

調査区の基本層序は、上から耕作土、床土、包含層が堆積する。包含層の状況は場所によって異なるが、おおむね灰褐色土、茶褐色砂質土が堆積し、その下が黄褐色粘質土の地山となる。灰褐色土は調査区のほぼ全面に広がり、中世の遺物を含む。茶褐色砂質土は弥生時代の遺物を含み、遺構の検出はこの茶褐色砂質土、ないしは地山上面で行った。また、古墳時代の流路にあたる部分では、その埋土上層にあたる灰色砂層の上面で遺構を検出した。地山は基本的には黄褐色粘質土であるが、場所により灰褐色砂質土や暗褐色砂礫土となる部分がある。

第47次調査区SD4130の肩付近などで、灰褐色土と茶褐色砂質土の間に砂交じり灰褐色砂質土の薄い層がみられ、整地土の可能性もあるが、部分的なものであり、藤原京期の明確な整地土は確認できなかった。

建物平面模式図の記号については次のように使い分ける。又、番付は、東南隅を「イ一」とし、南北方向を「イ、ロ、ハ……」、東西方向を「一、二、三……」とした。

○ 掘方・抜取り穴のみの柱穴　● 柱根を残す柱穴

⦿ 柱痕跡を残す柱穴　⊗ 礎板（礎板石）を残す柱穴

A　藤原京期の遺構

i　藤原京造営期（Ⅲ-A期）の遺構

条坊道路が通り、一町占地の時期。先に条坊遺構について概観し、その後各坪の遺構について記述する。

a　条坊関連遺構（Pl. 2～10，Ph. 5・6・8・12・22・23・30・36・41・42）

六条条間路SF4750　第50次調査西区から第46次調査区、第47次調査区、第45次調査中央区にかけて検出した東西方向の道路。北側溝SD4139と南側溝SD4311の、いずれかを確認した総長は約87mにおよぶ。第47次調査区で両側溝を揃って検出した場所が約19mあり、側溝心々間距離は8.8mである。上面は強く削平されており、道路を築いた整地は確認されず、両側溝とも東側では礫交じりの暗褐砂質土の地山面から掘り込んでいる。大土坑SK4327以東では南側溝と考えられていたSD4119がSD4311より3m北に位置し、道路幅が途中で3m狭くなる可能性が指摘されていた。しかし、今回は一連の遺構とみなすことはせず、SK4327以東では南側溝は削平されたか、施工されなかったものと考えたい。道路心は坊の南北二等分線より北へ14mずれるが、南側溝SD4311が東三坊坊間路東側溝SD4301と繋がること、側溝の埋土の状況が似ていることから、条坊道路であると判断した。

六条条間路北側溝SD4139（Fig. 42）　第47次調査区から第45次調査中央区にかけて検出した東西方向の素掘溝。合わせて約57mを確認した。西端はⅢ-B期の塀SA4730から17m西まで延び、東端はⅢ-B期の南北溝SD4131付近で途切れる。東端は、『藤原概報16』では第45次調査区東端までを一連の溝とみていたが、検出状況や断面形状からみて、SD4131より東は中世の南北溝SD4141とつながり、第50次調査東区と第53次調査北区で検出した東西溝SD5942と一連となるとみて、SD5942に含めた。SD4131との重複関係は検出時に明らかにすることができなかった。検出面での幅は1.1～2.0m。北岸は場所によりやや蛇行するが、南岸はほぼ直線となる。断面は方形に近く、底は平坦である。検出面からの深さは20～40cmを測る。底面の標高は西端で75.6mである。

六条条間路南側溝SD4311（Fig. 42）　第50次調査西区から第46次調査区、第47次調査区にかけて検出した東西方向の素掘溝。合わせて48mを確認した。西端は東三坊坊間路東側溝SD4301に接続し、東端は藤原宮期の土器を出土する大土坑SK4327に連なる。検出面での幅は0.6～1.3m、深さは20～30cmを測る。埋土は地山由来と思われる礫交じりの暗褐色砂質土で、一気に埋め立てた状況を呈する。底部には灰色の粘質土が10cmほど堆積しており、溝の機能時にはごく

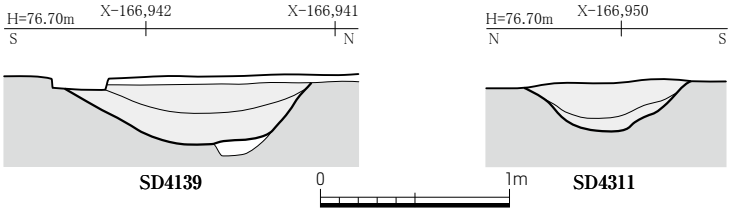


Fig. 42　SD4139・4311断面図（Y-16,707）　1:40

ゆるやかな水流、または滞留の状態であったことがうかがえる。溝底は基本的には西に向かって低くなり、SD4301との接続部付近でごくわずかに深くなる。底面の標高は西端で76.3mである。SK4327との重複関係は、検出時には明らかにすることができなかった。埋土の状態から判断すると、SK4327の上層とSD4311が同時に埋没した可能性も否定できないが、SK4327出土の土器の方がやや新しい様相を示す。

東三坊坊間路SF4300　第50次調査西区から第46次調査区、第53次調査南区にかけて検出した南北方向の道路。SD4301を東側溝、SD4302を西側溝とし、確認した総長は約87mにおよぶ。側溝心々間距離は7.4mである。上面は強く削平されており、道路を築いた整地は確認していない。両側溝には流水または滞水の痕跡は特にみられず、また、両側溝の埋没後にⅢ-B期の建物SB5000やⅢ-C期の建物SB4340の柱穴を掘り込んでいることから、SF4300が道路として機能していた期間は比較的短い可能性が高い。道路心は朱雀門の心から東に666m（約2250尺＝2坊半）に位置する。

東三坊坊間路東側溝SD4301　第53次調査南区から第46次調査区、第50次調査西区に向けて北流する南北方向の素掘溝。合わせて約87mを確認した。北端は六条条間路南側溝SD4311に接続し、南は遺構面の削平により、第53次調査南区で途切れる。検出面での幅は0.8～1.3m、深さは10～60cmを測り、断面は法面がなだらかな円弧状または逆台形となる。埋土は砂質土で、底部に流水や滞水の痕跡は特にみられない。溝底は基本的には北に向かって低くなり、底面の標高は北端で76.3mである。東南坪中央部の東西溝SD4285との交点付近で、溝底に30cmほどの段差がみられ、北が深い。後述するように、東三坊坊間路西側溝SD4302の溝底にも位置は異なるが同様の段差が認められ、施工時の作業工程やその単位をうかがうことができる。溝埋土の上からⅢ-B期の建物SB5000やⅢ-C期の建物4340の柱穴を掘り込んでおり、これらの建設以前に廃絶したものである。

東三坊坊間路西側溝SD4302　第53次調査南区から第46次調査区、第50次調査西区に向けて北流する南北方向の素掘溝。第46次調査区では一部で後世の強い削平を受けており、断続的に約87mを確認した。北端は六条条間路SF4750の南側で止まるが、西側にその南側溝は検出していない。南端は第53次調査南区で、削平のために途切れる。検出面での幅は0.6～1.1m、深さは5～45cmを測る。断面は方形に近く、底は平坦である。埋土は黄灰色の砂質土で、底部に流水や滞水の痕跡は特にみられない。溝底は基本的には北に向かって低くなり、底面の標高は北端で76.4mである。東三坊坊間路東側溝SD4301と同様に、東南坪中央部の東西溝SD4285の延長付近で溝底に30cmほどの段差がある。他にも段差がみられるところが数か所あり、溝底はなだらかな傾斜をもつものではなかった可能性がある。流水による影響をあまり受けず、施工時の姿がそのまま残ったものとも考えられる。溝埋土の上面からⅢ-B期の建物SB5000の柱穴が掘り込んでおり、SB5000の建設以前に廃絶したものである。

南北大溝SD4143（Fig. 43）　調査区全体の東端で検出した、北流する南北溝。第45次調査Ⅰ・Ⅱ区を含め、第53次調査北区、第50次調査東区、第53次調査中区で、長さ94mにわたり西岸を確認した。西岸は調査区北半ではほぼ直線であるが、南半では大きく西に広がる。東岸を確認した箇所はなく、全体の幅は不明である。第45次調査では、Ⅰ区において西岸から19m分を確認しており、現地形等を勘案して幅は25mほどと推定している。香具山の西麓に沿って流路は

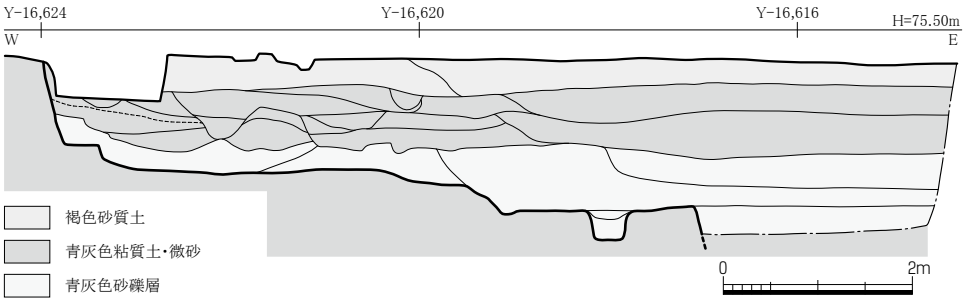


Fig. 43　SD4143断面図（X-166,968）　1:80

蛇行し、調査区より北では直線状に延びるという、現在の「中ノ川」と大差ない流路を調査区周辺では基本的にたどっていたと推定される。

深さは検出面から最大1.5mを掘り下げたが、底の確認には至っていない。検出長が長く、埋土の状況は場所により異なるが、おおむねは以下のとおりである。最上層は厚さ30cmの褐色砂質土で、流路の西肩よりもやや西にはみ出して堆積しており、最終的な流路埋め立て土とみられる。この層からは12世紀後半の土器が出土しており、その時期がわかる。その下に厚さ60cmほどの青灰色の粘質土や微砂が堆積しており、この層には中世の遺物を含む。その下に青灰色の砂礫層を、最大70cm確認した。磨滅した瓦や土器を含むこの層は固くしまっており、奈良時代や藤原宮期、および断片的な飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器を含む。底面には段を形成する箇所がみられ、その直上にこの砂礫層が堆積する。幅や深さ、流路を少しずつ変えながら、堆積と激しい水流による浸食を繰り返していた様子がうかがえる。

b　東北坪の遺構（Pl. 2～4，Ph. 4・6・9・10・22・23・25・30・43）

南北塀SA4170　第45次調査中央区と第133-7・13次調査区で検出した掘立柱南北塀。20間分、約42mを確認した。南端はSA4171と接続し、北端は第133-7次調査区内で途切れる。柱間寸法は場所により1.8～3.1mとばらつきがある。特に第133-13次調査区で検出した、南から15～17基目の間は柱間寸法が3.1mで、これ以外の箇所は1.8～2.4mにおさまる。柱穴は楕円形、隅丸方形、長方形や不整形と様々で、長辺の長さは0.6～1.3mと、形や大きさにばらつきがみられる。深さはおおむね検出面から40～60cmを測るが、場所により遺構面が削平され、深さ15cm程度しか残らない柱穴もある。北端の柱穴には径14cmの柱根が遺存するが、北に大きく傾いており、廃絶時の抜取または切断作業により傾いたと考えられる。SA4172とおよその柱筋と方位を揃え、柱穴に重複関係があり、SA4170の方が古い。南から7・8基目の柱穴は東西大溝SD4130に壊されており、それより古い。SA4170・4171・4732・5005が一連の塀で、南に門SB4735を開く、区画施設に相当すると考えられる。西限の区画塀SA5005との距離は、66.1mとなる。

南北塀SA4172　第45次調査中央区で検出した掘立柱南北塀。6間分、12.6mを確認した。SA4170とおよその柱筋と方位を揃え、柱穴が重複し、それより新しい。南端はSD4130以南には延びず、北に隣接する第133-13次調査区では検出していない。柱間寸法は場所により若干ばらつきがあるが、おおむね2.1m（7尺）等間である。柱穴は隅丸方形または東西に長い隅丸長方形で、長辺は0.6～0.9mである。深さは検出面から25～30cmを測る。柱穴の埋土には炭化物

を含み、柱痕跡や柱根は確認していない。

東西塀SA4171A・B　第47次調査区で検出した掘立柱東西塀。SA4171Aは９間分、約20ｍを確認した。柱穴は９基のみ確認しているが、西端から４基目はSA4171Bの柱穴と完全に重複する。柱間寸法は場所によりばらつきがあり、2.1～3.0ｍで、2.4ｍまたは2.5ｍとなる箇所が多い。[2]柱穴は隅丸方形で、一辺は0.7～0.9ｍである。深さは検出面から40～55㎝を測る。柱痕跡や柱根は確認していない。Ⅲ-Ｃ期の内郭東限の南北塀SA4729と遺構の重複関係があり、それより古い。

SA4171Bは、SA4171Aを同位置で建て替えたもの。12間分、約29ｍを確認した。東端はSA4170の南端に接続し、西端は門SB4735の東南隅柱より0.6ｍ東、1.4ｍ南の位置で止まる。柱間寸法は場所によりばらつきがあり、2.1～3.0ｍで、2.4ｍ前後となる箇所が多い。柱穴は隅丸方形で、長辺は最大1.3ｍとなるものがあるが、おおむね0.8ｍ程度である。深さは検出面から25～45㎝を測る。西端から６基目の柱穴には柱痕跡として灰褐色の粘質土が残り、柱径は20㎝前後であったと推定される。Ⅲ-Ｂ期の南北塀SA4730と遺構の重複関係があり、それより古い。区画の南限塀。

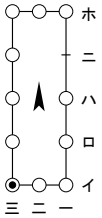
東西塀SA4732　第47次調査区と第50次調査西区で検出した掘立柱東西塀。西半を中世の溝SD4743によって壊されており、東側５間分12.2ｍと、西端の柱穴１基を確認した。総長は28.3ｍ、12間になると推定される。東端は門SB4735の西南隅柱より0.6ｍ西、1.4ｍ南の位置で止まり、西端はSA5005の南端に接続する。柱間寸法は東側の５間で2.2～3.8ｍで、2.4ｍ前後となる箇所が多い。柱穴は隅丸または不整形な長方形で、長辺は0.6～1.0ｍである。深さは検出面から30～55㎝を測る。柱痕跡や柱根は確認していない。Ⅲ-Ｂ期の建物SB4737およびⅢ-Ｃ期の建物SB4738と遺構の重複関係があり、それより古い。東西塀SA4171の延長上に位置し、ともに区画の南限塀である。

南北塀SA5005　第50次調査西区で検出した掘立柱南北塀。中間を東西大溝SD4130に壊される。北側で８間分16.4ｍ、南側で４間分9.2ｍを検出し、総長は約38ｍで19間になると推定される。南端はSA4732と接続し、北端は中世の井戸SE5055に重複するため断定はできないが、調査区外へ延びると考えられる。柱間寸法はSD4130の両岸で確認されている部分においては、南端の１間が3.0ｍとなる以外は2.0ｍ前後で、それによりSD4130に壊されている部分は６間になると推定した。柱穴は隅丸方形で、長辺は0.6～1.0ｍで0.8ｍ前後になる箇所が多い。深さは検出面から30～60㎝を測る。北端から３基目の柱穴には灰色粘質土の柱痕跡があり、柱径は12㎝前後と推定される。遺構の重複関係により、Ⅲ-Ｃ期の建物SB5035・4738、Ⅳ期の建物SB5050より古い。一連の区画施設の西限塀である。

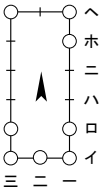
門SB4735　第47次調査区で検出した、桁行３間×梁行１間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行8.0ｍ×梁行3.2ｍで、柱間寸法は桁行が2.67ｍである。柱穴は隅丸方形で、一辺が0.9～1.4ｍである。深さは検出面から55～80㎝ほどである。東南隅の柱穴には柱痕跡が灰色粘土として残り、柱径は18㎝ほどである。南側柱筋が東西塀SA4171・4732より1.4ｍ北にあり、南北塀SA4170と南北塀SA5005による区画の中軸線に心が一致する。SA4170・4171・4732・5005が一連の区画施設で、区画の南辺中央に開く門。

東西塀SA4760　第47次調査区で検出した、４間の掘立柱東西塀。長さは10.2ｍ、柱間寸法は

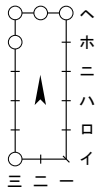
2.55m。柱穴は1辺0.9～1.1mの隅丸方形で、検出面からの深さは50cmほどである。両端の柱穴には柱痕跡が暗灰色の粘質土となって残り、西端の柱痕跡は中心に木質も遺存する。柱痕跡から推定される柱径は20cmである。門SB4735の北側柱筋から15.5m北、中央の柱がSB4735の中軸線に位置し、目隠し塀と考えられる。



掘立柱建物SB4175　第45次調査中央区から第47次調査区、第133-13次調査区にまたがって検出した、桁行4間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。ニ一の柱穴がSE4177に壊されなくなっている。建物の規模は桁行11.5m×梁行3.6m、柱間寸法は桁行2.88m、梁行が1.8mである。柱穴は隅丸方形で、一辺0.7～0.8mを測る。柱穴の深さは検出面から40cm程度が残る。妻柱の掘方は一辺0.6m程度、深さは側柱筋と変わらない。イ三の柱穴に柱痕跡があり、柱の径は15cm程度と推定される。

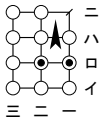


掘立柱建物SB4761　第45次調査中央区から第47次調査区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。第45次調査では南北塀SA4173と東西塀SA4174と認識していたが、第47次調査で北西隅の柱穴を検出したことにより、南北棟建物と判断した。東側柱筋の柱穴のうちハ一・ニ一は東西大溝SD4130に壊され、西側柱筋の柱穴のうちハ三・ニ三・ホ三は調査区外にあたる。SD4130の両岸で南妻の柱穴を確認しているが、北妻柱は検出していない。建物の規模は桁行9.7m×梁行4.1mで、柱間寸法は桁行が1.94m、梁行が2.05mである。柱穴は隅丸または不整形な方形で、一辺が0.7～1.2mである。深さは検出面から35～55cmほどである。柱穴埋土には拳大の石が入り、南妻の柱穴では特に多くみられる。ヘ三の柱穴が西側の建物SB4762と重複関係があり、それより新しい。ロ一の柱穴が南北塀SA4170と重複関係があり、それより古い。

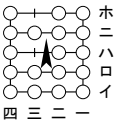


掘立柱建物SB4762　第45次調査中央区、第47次調査区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。東西大溝SD4130の北岸でホ三・ヘ一・ヘ二・ヘ三の柱穴を、南岸でイ三の柱穴を確認している。建物の規模は桁行9.4m×梁行3.7mで、柱間寸法は桁行が1.8m、梁行が1.85mである。柱穴は隅丸または不整形な方形で、一辺が0.7～0.9mである。深さは検出面から40～80cmほどである。ヘ一の柱穴が東側の建物SB4761と重複関係があり、それより古い。

土坑SK4734　第47次調査区で検出した不整形土坑。南北方向4.7m、東西方向1.9m。検出面からの深さは50cmで、底部にはところどころ10～20cmの窪みがある。壁の傾斜は比較的急で、底部の東西壁際に杭跡とみられる径5～10cmの円形小穴が並ぶ。埋土からは三重弧文軒平瓦や古代の道具瓦が出土した。遺構の重複関係があり、東西大溝SD4130より古く、建物SB4762より新しい。



掘立柱建物SB5020　第50次調査西区で検出した、総柱の掘立柱南北棟建物。桁行3間×梁行2間、建物の規模は桁行5.0m×梁行3.6m。柱間寸法は桁行が1.67m、梁行が1.8m。柱穴は隅丸または不整形な方形で、大きさは60～90cmである。側柱の柱穴より、内部の柱穴のほうが小型である。深さは検出面から30～50cmを測る。ロ一・ロ二の柱穴に柱痕跡が灰色または黄灰色の粘質土となり遺存する。痕跡から推定される柱径は20～25cmである。ニ一の柱穴はⅥ期の井戸SE5023に壊されている。



掘立柱建物SB4140　第45次調査中央区で検出した、桁行４間×梁行３間の掘立柱南北棟建物。ロ二・ハ二・ニ二の柱穴は間仕切りと考えられる。また、ロ三・ニ三の位置にも小型の穴があり、間仕切りなどであった可能性が考えられる。建物の規模は桁行5.3m×梁行4.9m、柱間寸法は桁行が1.33m、梁行が1.63mである。柱穴は一辺0.6～1.0m前後の隅丸方形または不整形な楕円形で、埋土は明茶褐色の砂質土が主体である。深さは検出面から30～45cmを測る。間仕切りと考えられる内部の柱穴は、一辺0.6mほどの不整形長方形で、深さも検出面から20cm程度と浅い。Ⅳ期の建物SB4150と柱穴の重複はないが遺構の重複関係があり、同時併存はしない。小型で間仕切りが多く、建物の性格は道具や物を置く小屋と考えられる。

井戸SE10175（Fig. 44）　第133-13次調査区で検出した井戸で、井戸枠は全て抜き取っている。平面は南北2.5m、東西2.7mの不整形な楕円形で、底面では南北1.5m、東西1.9mの隅丸方形を呈する。深さは検出面から1.6mを測る。埋土は橙黄色粘土塊交じりの灰色粘質土で、井戸枠抜取後に一気に埋め立てた土とみられる。底部は比較的平旦で、地山とみられる暗灰色砂礫土を検出している。方形板組の井戸であった可能性が考えられる。埋土からは藤原宮期の土器が出土した。

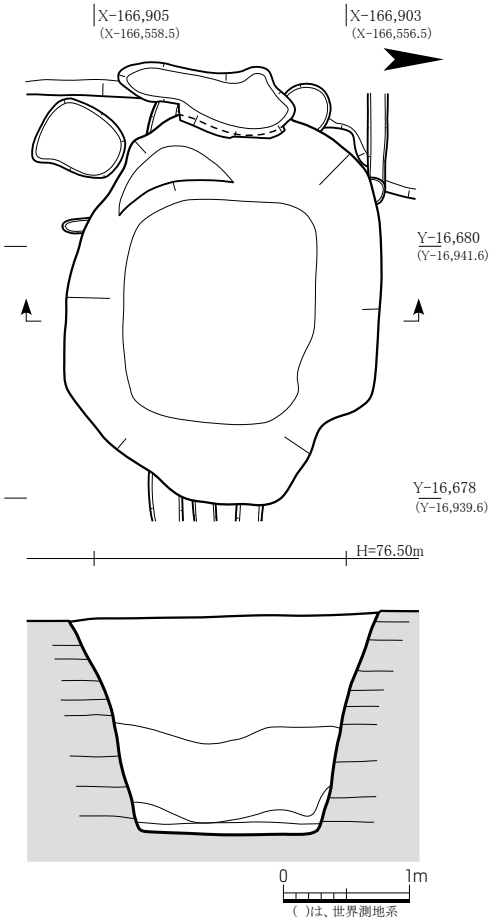


Fig. 44　SE10175平面図・断面図　1:60

c　東南坪の遺構（Pl. 6～8・10・11，Ph. 12・13・17・18・40・42）

南北塀SA4282　第46次調査区、第53次調査南区で検出した掘立柱南北塀。24間分、50.6mを確認した。南端は調査区外に延びる。北側は削平されたためか検出できず、第50次調査西区でも延長上に検出していない。柱間寸法はおおよそ2.1m等間である。柱穴は0.8～1.1mの隅丸方形。深さは検出面から15～30cmと非常に浅く、強い削平を受けているとみられ、特に北端の柱穴は15cmほどしか残存しない。明確な柱痕跡や柱根は確認していない。柱穴に重複関係があり、Ⅲ-C期の建物SB4340およびⅥ期の井戸SE4463より古い。東三坊坊間路東側溝SD4301の２m東に位置し、南から15基目にSA4284が接続する。六条三坊東南坪西限を限る南北塀。

東西塀SA4284　第46次調査区で検出した掘立柱東西塀。22間分、45.7mを確認した。3.8m北側に東西溝SD4285を伴う。柱間寸法はおおよそ等間隔で、2.08mである。柱穴は40～75cmの隅丸方形または不整形方形。深さは検出面から25～30cmを測る。東から11基目には黄灰色粘土

の柱痕跡がある。遺構に重複関係があり、Ⅲ-Ｂ期の南北塀SA4286、Ⅲ-Ｃ期の建物SB4330、Ⅳ期の建物SB4350より古い。六条三坊東南坪の南北二等分線よりやや北に位置し、坪を南北に分ける塀と考えられる。

東西溝SD4285　第46次調査区で検出した、東西塀SA4284に伴う東西方向の素掘溝。幅0.6～１m、深さ0.2m、長さ45m。遺構の重複関係があり、Ⅴ期の大土坑SK4390より古い。SA4284の北3.8mに位置し、西端は東三坊坊間路東側溝SD4301に接続し、東端はSA4284の東端と揃う。

南北溝SD4255（Fig. 45）　第45次調査中央区から第46次調査区にかけて検出した南北方向の素掘溝。合わせて約28m分を検出した。南端で、東西溝SD4083とＬ字状に接続する。幅は0.7m、検出面からの深さは25～35cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は底に粘質を帯びた黄灰色細砂が薄く堆積し、上層は約10cmの暗黄灰色砂質土となる。その上面に７世紀中葉の丸・平瓦が堆積するが、溝全体ではなく断続的に瓦が集積する状況である。ただし、瓦は溝の外や溝肩より上まで広がることはない。遺構の重複関係があり、Ⅲ-Ｃ期の東西溝SD4119およびⅥ期の井戸SE4470より古い。

Fig. 45　SD4255瓦出土状況（北から）

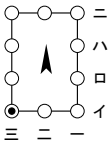
東西溝SD4083　第46次調査区、第53次調査中区、第45次調査Ⅲ区、第50次調査東区にかけて検出した東西方向の素掘溝。西端で南北溝SD4255に流れ込む。合わせて23.2m分検出した。幅は１m前後、深さは検出面から最大で20cmを測る。

南北溝SD4256　第46次調査区で検出した南北方向の素掘溝。北端は南北溝SD4255から延び、南端で東西溝SD4084と接続する。幅0.5～1.0m、長さ7.5m、検出面からの深さは15cmほどの非常に浅い溝である。

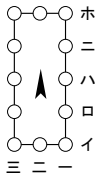
東西溝SD4084　第46次調査区東端から第53次調査中区にかけて検出した、東西方向の素掘溝。西端でSD4256と接続する。長さ11.8m分を検出した。幅0.5～0.6m、深さは検出面より10～20cmを測る。方位は東で南に8.8°振れる。

南北溝SD4257　第46次調査区で検出した南北方向の素掘溝。SD4256の約7.0m西に位置し、断続的に総長約34mを確認した。非常に浅く、検出面からの深さは最大で20cm程度が残るのみである。Ⅲ-Ｃ期の南北塀SA4320と遺構の重複関係があり、それより古い。方位は北で東へ1.7°振れる。

掘立柱建物SB4290　第46次調査区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行6.4m×梁行4.4m、柱間寸法は桁行が2.13m、梁行が2.2mである。柱穴は一辺0.9～1.0mの隅丸方形で、深さは検出面から25cm程度である。イ三の柱穴には柱痕跡が暗灰色の粘土として残る。遺構に重複関係があり、Ⅳ期の建物SB4351およびⅥ期の井戸SE4460より古い。



掘立柱建物SB4291　第46次調査区で検出した、桁行４間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物



の規模は桁行8.7m×梁行3.3m、柱間寸法は桁行が2.18m、梁行が1.65mである。柱穴は一辺0.6mほどの隅丸方形または東西に長い長方形で、深さは検出面から35㎝程度である。

土坑SK4325　第46次調査区で検出した大規模な土坑。南北7.2m、東西5.5mの不整形な楕円形を呈する。底面は凹凸があり、深さは検出面から30～70㎝を測る。複数の土坑を重ねて掘ったような様相を呈しており、特に東南隅には一辺2.2mの隅丸方形に深く掘り込んだ部分があり、深さは検出面から1.6mを測る。この部分の埋土は、下から青灰色の微砂と粘質土が堆積し、その上にチョウナのはつり屑などの木屑を多量に含む腐植土層がある。土坑全体の埋土は、下層に瓦や土器等の遺物を多く含む山砂が、土坑の肩から流れ込むように細かい層をなして堆積しており、上層は山土交じりの灰褐色土で一気に埋めている。上層埋土には7世紀中葉の瓦を含む。SK4325の性格は、Ⅲ-A期の施設解体時の塵芥処理用の土坑と考えられる。土坑を埋めた後には、同位置にⅢ-B期の井戸SE4335を掘削する。

土坑SK4271　第46次調査区で検出した井戸状の土坑。平面は南北1.4mの円形で、検出面からの深さは90㎝。断面形状は深さ70㎝まではすり鉢状で、その下は幅80㎝で垂直に掘り下げる。埋土は褐色の粘質土が主体で、人為的に埋め立てたものとみられる。埋土からは7世紀中頃の瓦や、飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土した。遺構はⅢ-C期の建物SB4333の内部に位置し、それより古い。

d　西南坪の遺構（Pl. 6・10，Ph. 12・30・42）

南北塀SA4283A・B（Fig. 46）　第46次調査区と第53次調査南区で検出した掘立柱南北塀。全長47.7m、21間分を検出し、南北ともさらに延びる可能性がある。第46次調査区西北部に位置する水田は地下げが著しく、多くの遺構が消滅してしまっている。SA4283Aは、21間分22基の柱穴を検出した。柱間寸法は1.8～2.7mとやや不揃いだが、2.2mまたは2.4mとなる箇所が多い。柱穴は一辺0.6～0.8mの隅丸方形。柱穴底面の標高は南から8～13基目で76.7～77.0mと低く、その南北両側は高い。それにともない、柱穴の深さは南から8～13基目で検出面から50～70㎝、その南北両側では検出面から10～25㎝を測る。柱掘方埋土は暗灰褐色の粘質土を基本とし、深い柱穴では層状をなすものもある。南から13基目の柱穴では柱痕跡が粘質土となって残り、その径は約15㎝である。

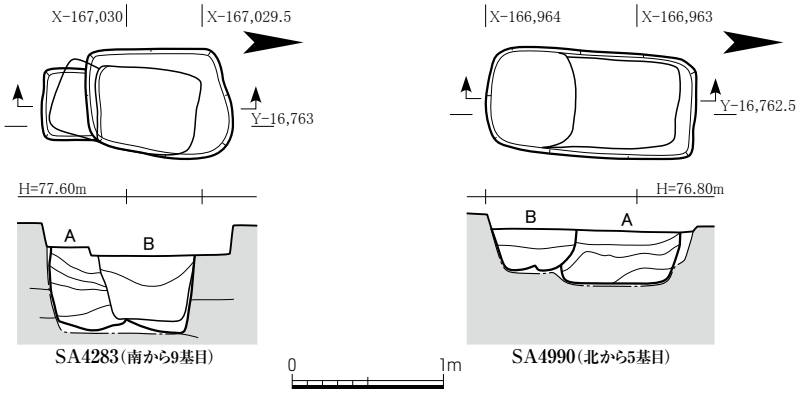


Fig. 46　SA4283・4990柱穴平面図・断面図　1:50

SA4283Bは、SA4283Aのうち南から８～10基目の３基と、18～22基目の５基の柱穴をほぼ同位置で建て替えたもの。８～10基目は柱間寸法2.0m等間、柱穴は長辺0.8mほどの隅丸方形。18～22基目は柱間寸法2.2m等間で、柱穴は一辺0.4～0.6mの隅丸方形である。いずれも深さは検出面から45～60㎝を測る。埋土は黄褐色粘質土を基本とし、層状をなすものもある。東三坊坊間路西側溝SD4302の５m西に位置し、柱筋を北側に延長した位置に南北塀SA4990A・Bを確認している。六条三坊西南坪東限を限る南北塀。

南北塀SA4990A・B（Fig. 46）　第50次調査西区西端で検出した掘立柱南北塀。柱穴が重複しており、２時期の建て替えがある。SA4990Aは８間分９基の柱穴を、SA4990Bは８間分８基の柱穴を確認している。南は調査区外へ延び、第46次調査区北側では確認できず、南延長上で南北塀SA4283を検出している。柱間寸法はSA4990Aが2.3～3.4m、SA4990Bが2.4～2.8mと不揃いである。柱穴は0.5～0.8mの隅丸方形または楕円形で、深さは検出面から20～50㎝を測る。形状や大きさ、深さはSA4990A・Bとも不揃いで、時期による傾向は認められなかった。SA4990Aの柱穴は掘方のみで、抜取穴も柱痕跡も確認できず、施工途中で立柱を中止した可能性も考えられる。SA4990Bの北から３基目の柱穴には柱痕跡が灰褐色の粘質土で残り、柱径は15㎝ほどである。遺構の重複関係より、Ⅲ-Ｂ期の建物SB5000とは並存しないため、Ⅲ-Ａ期以前で建て替えられたものと考える。東三坊坊間路西側溝SD4302の西５mに位置し、六条三坊西南坪の東限南北塀であると判断される。

ii　藤原京期（Ⅲ-Ｂ・Ｃ期）の遺構

条坊を廃し、四町を一体として利用する時期。Ⅲ-Ｂ期とⅢ-Ｃ期に細分され、Ⅲ-Ｃ期は藤原京廃絶期の一時的な遺構をも含む。左京六条三坊は掘立柱塀で内郭と外郭に区画し、内郭には正殿を中心として大型の掘立柱建物を整然と配置する。ここでは初めに区画施設について記述し、その次に内郭の遺構、外郭の遺構の順に述べ、最後に藤原京廃絶期の遺構をまとめた。

a　区画施設の遺構（Pl. 3・7・11，Ph. 14・16・23・24）

南北塀SA4286（Fig. 47）　第46・47次調査区で検出した掘立柱南北塀。これまで『藤原概報16』・『同17』等ではSA4280・4281の２条の塀としてきたが、一連の塀と認定し、遺構番号も付け直した。36間分、84.9mを確認した。南端は調査区外へ延び、北端の柱穴はくぐり門SB4726の南側の柱を兼ねる。

検出した柱穴は34基であるが、第46次調査区と第47次調査区の間にもう１基柱穴があったと考えられる。南から24基目の柱穴の掘方が２基分重複し、南側が古い。南から16基目と20基目の柱穴はⅢ-Ｃ期の建物SB4331の東側柱筋の柱穴と完全に重複している。柱間寸法は場所によりばらつきがあり、最小は1.7m、最大は3.5mで、2.4m前後となる箇所が多い。柱穴は南北に長い隅丸長方形または隅丸方形

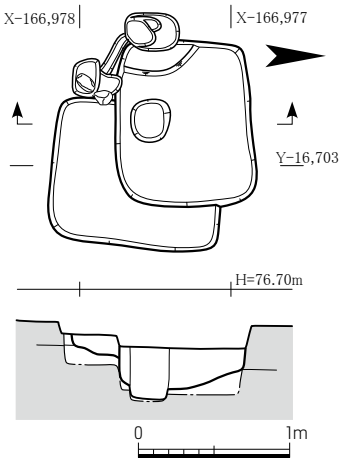


Fig. 47　SA4286柱穴
（南から24基目）
平面図・断面図　1:50

で、長辺は0.8～1.2mである。深さは検出面から15～40cmを測る。南半部は強い削平を受けて掘方は浅くしか残らず、柱痕跡や抜取穴は検出していない。一方、北半では柱痕跡が灰褐色の粘質土として残るものがあり、柱径は20cm前後と推定される。遺構の重複関係があり、Ⅲ-B期の大土坑SK4327、Ⅵ期の牛馬小屋SX4500より古く、Ⅲ-A期の東西塀SA4284、Ⅱ期の建物SB4242より新しい。位置は東三坊坊間路心から51m東で、Ⅲ-A期の東南坪西限の南北塀SA4282から45m東にあたる。SA4730とともに、Ⅲ-B期の内郭東限を画する塀である。

門SB4726（Fig. 48）　Ⅲ-B期の東限を画する塀SA4286北端の柱とSA4730南端の柱の間に開いたくぐり門。柱間寸法は4.0m。柱穴は、南側が一辺1.6mの隅丸方形で深さは70cm、北側が一辺0.8mの隅丸方形で深さは80cmである。SA4286・4730の柱穴よりかなり深く掘削している。いずれの柱穴にも掘方底部にまで達する抜取穴があり、柱は東の方向に抜き取っている。

南北塀SA4730（Fig. 48）　第47次調査区で検出した掘立柱南北塀。15間分、37.3mを確認した。南端の柱穴はくぐり門SB4726の北側の柱を兼ね、北端はSB4780の手前で途切れる。SB4726を挟んで、SA4286とは一連の塀とみられる。

柱間寸法は2.2～3.2mと場所によりばらつきがあるが、2.4m前後となる箇所が多い。柱穴は南北に長い隅丸長方形または隅丸方形で、長辺は1.0～1.2mである。深さは検出面から50～70cmである。南端から3～5基目の柱穴は検出面から90～100cmと深く、また穴の形もしっかりしている。3基とも北側に重複する形で検出面から10cm程度の浅い柱穴を伴っており、この3基のみ掘方を掘り直した、あるいは柱を立て直した可能性も考えられる。南端から3基目の柱穴には柱根が残っており、柱径は17cmほどである。遺構の重複関係があり、Ⅲ-A期の東西塀SA4171や六条条間路北側溝SD4139より新しい。位置は東三坊坊間路心から51m東にあたる。Ⅲ-B期の内郭東限を画する塀である。

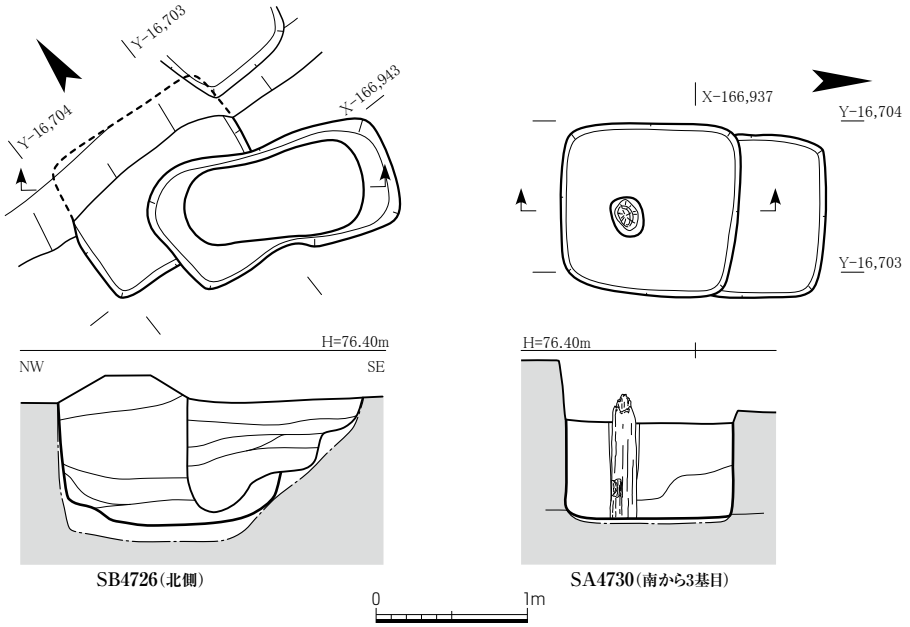


Fig. 48　SB4726・SA4730柱穴平面図・断面図　1:50

柱穴SP4830　第47次調査北拡張区で検出した掘立柱柱穴１基。SB4780の北側で、SA4730の延長上で検出したため、南北塀がさらに北へ続き、Ⅲ-Ｂ期の内郭東限を画する塀となる可能性がある。

南北塀SA4833　第47次調査区で検出した掘立柱南北塀。Ⅲ-Ｃ期の建物SB4780の西妻に重なって２間分、4.6ｍを確認した。柱間寸法は2.3ｍである。柱穴は長い隅丸方形または円形で、大きさは65～70㎝である。深さは検出面から10㎝未満しか残らず、ほとんど底が出ている。遺構の重複関係があり、Ⅲ-Ｃ期の建物SB4780より古い。柱筋は北で0.5°西へ振れる。先述の南北塀SA4730と柱穴SP4830の間、SA4730から1.5ｍ西に位置し、SA4730とSP4830間の出入口の目隠し塀であったと考えられる。南端の柱穴はSA4730北端の柱穴から0.3ｍ北、北端の柱穴はSP4830の2.0ｍ南に位置しており、調査区外にもう１間北へ延び、全部で３間であった可能性も考えられる。

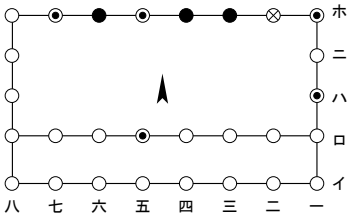
南北塀SA4320　第46・47次調査区で検出した掘立柱南北塀。31間分、73.9ｍを確認した。南端は調査区外へ延び、北端の柱穴はくぐり門SB4725の南側の柱を兼ねる。柱間寸法は場所によりばらつきがあり、最小で2.0ｍ、最大で4.0ｍとなる箇所があるが、2.4ｍ前後となる箇所が多い。柱穴は南北に長い隅丸長方形または隅丸方形で、削平されて小さくなっているものを除けば、長辺は1.0～1.3ｍで、深さは検出面から20～30㎝を測る。埋土は黄灰色の砂質土または粘質土である。南端から９・20・24・28基目の柱穴には柱痕跡が灰色の粘質土として残っており、柱径は15～20㎝と推定される。遺構の重複関係があり、Ⅳ期の東西溝SD4357、Ⅵ期の井戸SE4467より古い。東三坊坊間路心から約60ｍ東の位置にあたる。SA4286を10ｍ東に移設したもので、SA4729とともにⅢ-Ｃ期の内郭東限を画する塀である。

門SB4725　SA4320北端の柱とSA4729南端の柱の間に開いたくぐり門。柱間寸法は3.3ｍ。柱穴は一辺1.3ｍの隅丸方形で、深さは南側の柱が110㎝程度、北側の柱が80㎝程度と、SA4320・4729の柱穴よりかなり深く掘削している。埋土は黄褐色の粘質土または砂質土である。南側の柱穴には柱痕跡が灰色の粘土として残っており、柱の径は20㎝程度であったと推定される。SA4320・4729より柱穴が深いことから、建てられた柱の高さが高いこと、あるいは上部に冠木や簡易な屋根を載せたなど、塀部分とは異なる上部構造をもっていたことが考えられる。Ⅲ-Ｃ期の内郭東限を画する塀に開く門である。

南北塀SA4729　第47次調査区で検出した掘立柱南北塀。16間分、37.2ｍを確認した。南端の柱穴はくぐり門SB4725の北側の柱を兼ね、北端はSB4780の東妻に接続する。SB4725を挟んでSA4320とは一連の塀で、確認した総長は114.4ｍとなる。

柱間寸法は若干ばらつきがあるが2.3ｍ前後となる箇所が多い。柱穴は南北に長い隅丸長方形または隅丸方形で、削平により小さくなっているものを除けば、長辺は1.0～1.2ｍである。深さは検出面から10～30㎝が残る。南端から３・５基目の柱穴には柱痕跡が灰色の粘質土として残っており、柱径は20㎝前後と推定される。遺構の重複関係があり、六条条間路北側溝SD4139より新しい。東三坊坊間路心から、約60ｍ東の位置にあたる。SA4730を10ｍ東に移設したもので、Ⅲ-Ｃ期の内郭東限の塀である。

b　内郭の遺構（Pl. 2・3・6・7・11，Ph. 5・15～17・22・24・25・27・30～32）



掘立柱建物SB5000（Fig. 49）　第50次調査西区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行７間×梁行３間の身舎の南側に１間の廂が付く。廂は身舎と柱筋を揃えるが、西端の柱のみ東側に寄る。東三坊坊間路SF4300の両側溝を埋めた後に柱穴を掘っている。建物規模は身舎部分が桁行20.1ｍ×梁行7.9ｍ、廂の出は3.2ｍである。北側柱筋の３基の柱穴で柱根が遺存しており、これらから計測すると柱間寸法は桁行で2.86ｍとなる。梁行の柱間寸法は2.6ｍである。身舎の柱穴は一辺1.0～1.3ｍの隅丸方形。深さは検出面から45～85㎝を測る。東西妻とも、北から２基目の柱穴（ニ一・ニ八）は浅い。廂の柱穴は0.6ｍの隅丸方形で、深さは20～30㎝。身舎の柱穴より小さく、浅い。ホ三・ホ四・ホ六の柱穴には径30㎝ほどの柱根が遺存する。ホ二の柱穴底部には、木製の礎板が残る。礎板は32×36㎝の方形で、厚さ10㎝。遺構の重複関係があり、東三坊坊間路東

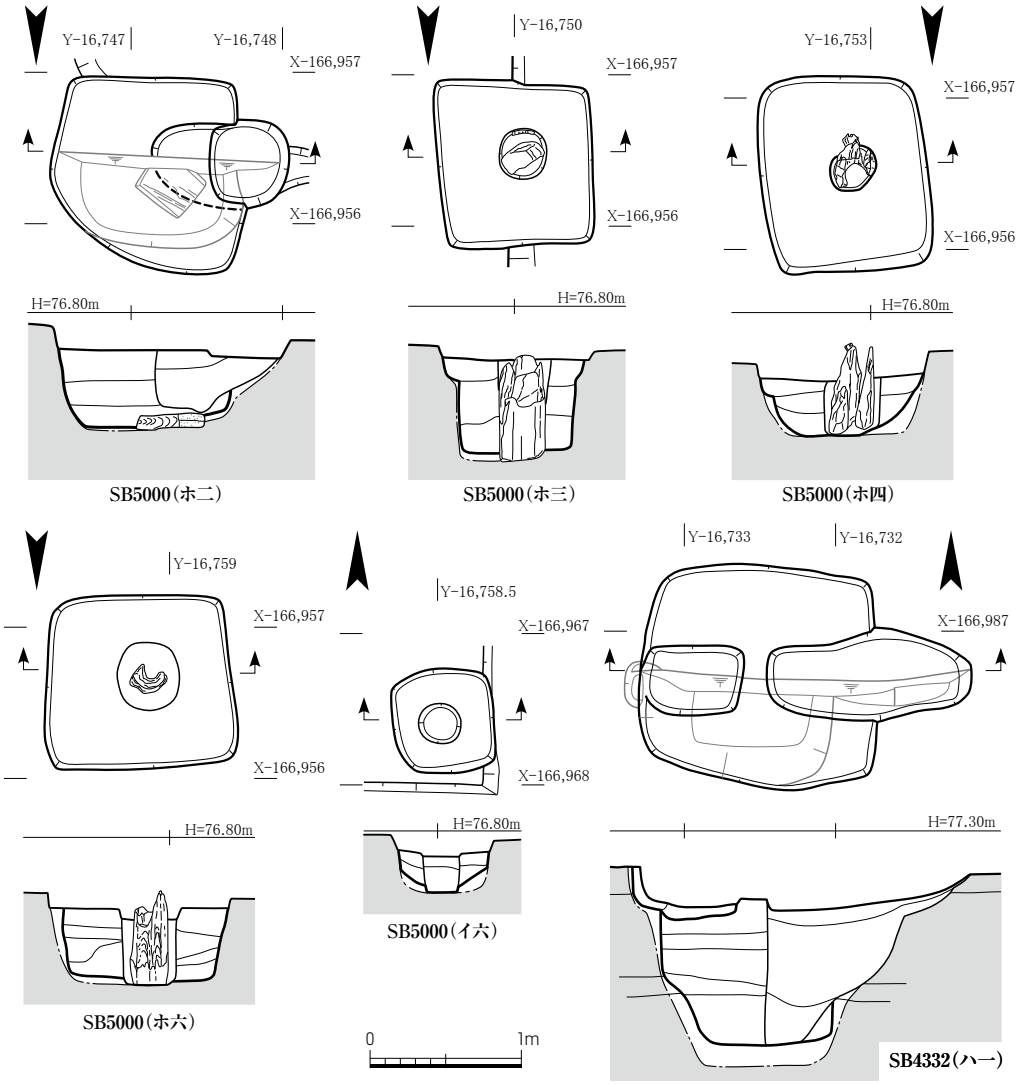
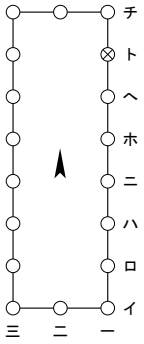


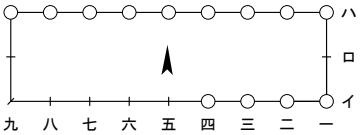
Fig. 49　SB5000・4332柱穴平面図・断面図　1:50

側溝SD4301より新しい。SB5000は、建物の東西中心線と坊間路SF4300の中心線が揃い、身舎の南北中心線は左京六条三坊の推定南北中心線と一致し、六条条間路と東三坊坊間路の交差点より13.7m南となる。坊のほぼ中心に位置することと、廂付きの規模の大きい建物であることから、左京六条三坊におけるⅢ-B期とⅢ-C期を通じた正殿と考えられる。



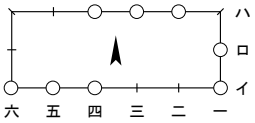
掘立柱建物SB4332（Fig. 49）　第46次調査区で検出した、桁行7間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行20.0m×梁行6.3m、柱間寸法は桁行2.86m、梁行3.15mである。柱穴は南北方向に長い隅丸長方形または隅丸方形で、長辺の長さが1.4～1.6mである。深さは検出面から90～110㎝を測る。柱穴の埋土は茶褐色の粘質土に灰色の粘土が交じり、層状をなし、底部は青灰色の微砂となる。大半の柱穴で抜取穴を確認しており、東側柱筋では東側に、西側柱筋では西側に、北妻では北側に、南妻では南側に柱を抜いた様子がわかる。ト一の掘方底部には大きさ24×19×10㎝の木片が遺存し、礎板であった可能性がある。また、複数の柱掘方と抜取穴で、小木片を確認している。同規模のSB4330・4331に比べ、柱穴が一回り大きく、深い。また、SB4330・4331のように妻柱が特に浅いということはない。西側柱筋はSB5000の心から15.6m（約53尺）東、北妻柱筋はSB5000の南入側柱筋から8.8m（約30尺）南にあたる。正殿SB5000に対する、Ⅲ-B期の東脇殿である。

幄舎SX4342・4343・4344・4345・4348・4349　第46次調査区のSB4340周辺で検出した小穴群。4棟の幄舎（第Ⅵ章Fig. 267参照）の妻側に刺した杭の痕跡。『藤原概報16』等では建物SB4340の四周を囲む掘立柱塀SA4341・4343・4344としていたが、解釈を改めた。幄舎は絵画資料よると簡易な骨組みに布の屋根を張ったもので、支柱の外側に打った杭で布を引っ張る。桁行・妻側の支柱はごく浅い掘削で痕跡が残らず、深く打ち込んだ妻側の杭のみが痕跡として残ったものと考える。SX4342・4343は南北方向に並ぶ3基単位の小柱穴群で、SX4342は全長3.7m、SX4343は全長5.2m。いずれも正殿SB5000の中心軸から東に12.4mの位置にある。東西棟幄舎の東妻側の杭の痕跡で、幄舎の桁行全長は中心軸で折り返すと24.8mとなる。SX4344・4345・4348・4349は東西方向に並ぶ3基単位の小柱穴群で、SX4344は全長4.5m、SX4345は全長4.6m、SX4348は全長4.5m。SX4349は西側の2基全長2.1mを検出し、東端の柱穴はⅥ期の井戸SE4463に壊される。SX4344が北妻でSX4349が南妻、SX4345が北妻でSX4348が南妻となる2棟の南北棟幄舎で、桁行全長はいずれも20.2m、4.5mの間隔で並行して建っていた。柱穴は隅丸方形または円形平面を呈し、大きさは最大50㎝程度である。深さは検出面から最大50㎝を測る。Ⅲ-B期にSB5000の正面に中心軸を揃えて建ち、前殿SB4340の建つ以前に儀式などの際に仮設していた可能性が考えられる。

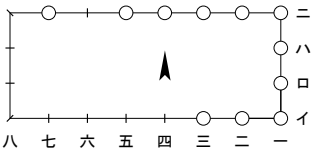


掘立柱建物SB4737　第47次調査区と第50次調査西区で検出した、桁行8間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。建物規模は桁行21.4m×梁行6.0m、柱間寸法は桁行が2.66m、梁行が6.0mである。東西の妻柱は確認していないが、梁行の柱間は2間分の長さがあるので、妻柱の掘方がごく浅く削平されたとみられる。柱穴は一辺0.9～1.2mの隅丸方形。深さは検出面から20～60㎝を測る。東のほうでより検出面が高くなるため、東の柱穴ほど残存が良好である。Ⅵ期の溝SD4743に重複するため、南側柱筋西半では柱穴

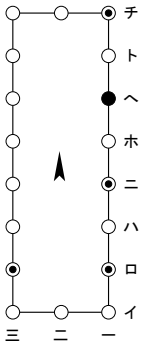
を明瞭に検出できなかった。南側柱筋はSB5000の身舎中心線から約20m北に位置し、東西中心線はSB4333の西妻に揃える。柱穴の重複関係があり、Ⅲ-A期の東西塀SA4732より新しく、Ⅲ-C期の建物SB4738より古い。正殿SB5000東北方に位置する、Ⅲ-B期の建物である。



掘立柱建物SB4789　第47次調査区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。SA4833の4.3m西にある。建物の西妻柱は検出しておらず、すぐ西側で中世大溝SD4755を検出していることから、桁行方向がもう1間西に延びる可能性もある。建物の規模は桁行13.6m×梁行5.3mで、柱間寸法は桁行が2.72m、梁行が2.65mである。柱穴は0.7～1.1mの不整形な方形で、埋土は暗褐色砂質土である。深さは検出面から浅いもので25cm、深いもので60cmほどである。イ三の柱穴はⅥ期の井戸SE4790に、ハ一の柱穴はⅥ期の斜行東西溝SD4791に壊される。内郭に位置するⅢ-B期の建物。



掘立柱建物SB4340（Fig. 50）　第46次調査区で検出した桁行7間×梁行3間の掘立柱東西棟建物。西半分は大きく地下げを受け、柱穴も削平されてしまっている。桁行方向は6間分を検出しており、その全長は15.6mである。西に1間延ばし桁行7間とするとSB5000と東西中心線が揃うため、それが妥当であろう。桁行7間に復元すると、建物の規模は桁行18.2m×梁行6.9m、柱間寸法は桁行が2.6m、梁行が2.3mとなる。柱穴は長辺1.2～1.5mの隅丸方形であり、遺構検出面からの深さは東南隅の柱（イ一）が100cm、側柱が50～60cmで、隅柱のほうが40cmほど深い。SB5000同様、東三坊坊間路東側溝SD4301より新しい。SB5000に対する、Ⅲ-C期の前殿と考えられる。



掘立柱建物SB4330（Fig. 50）　第46次調査区で検出した、桁行7間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行19.8m×梁行6.2m、柱間寸法は桁行2.83m、梁行が3.1mである。柱穴は南北方向に長い隅丸長方形または隅丸方形で、長辺は0.8～1.3mを測る。深さは検出面から40～80cmである。妻柱の柱穴は浅く、深さは検出面から25cmほどである。柱穴の埋土は灰褐色の粘質土を主

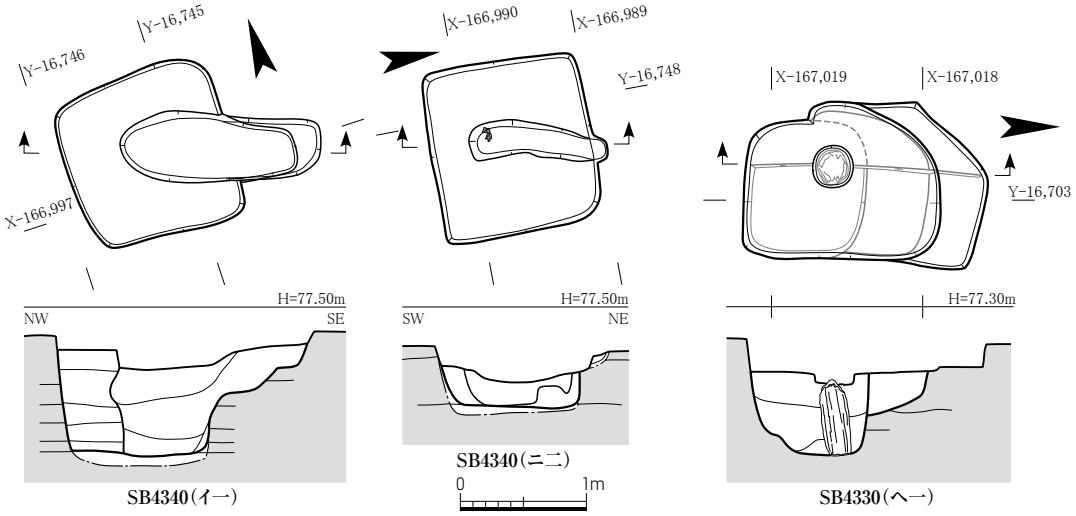
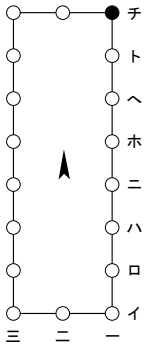
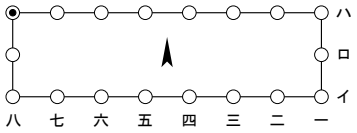


Fig. 50　SB4340・4330柱穴平面図・断面図　1:60

体とする。へ一の柱穴には径15㎝の柱根が残り、4基の柱穴に粘質土の柱痕跡がある。東側柱筋は、Ⅲ-B期の南北塀SA4286と同じ位置にある。北にあるSB4331との間隔は11.4mで、東西両側柱筋を揃える。柱穴の重複関係があり、SA4286より新しく、Ⅳ期の建物SB4350・4351より古い。Ⅲ-C期のSB5000の東脇殿と考えられる。

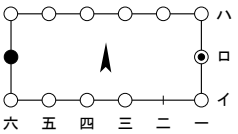


掘立柱建物SB4331　第46次調査区で検出した、桁行7間×梁行2間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行19.7m×梁行6.2mで、SB4330とほぼ同形同大である。柱間寸法は桁行が2.81m、梁行は3.1m。柱穴は南北方向に長い隅丸長方形または隅丸方形で、長辺の長さは1.0～1.4mである。深さは検出面から40～60㎝を測る。妻柱は浅く、検出面でほとんど底が出る。多くの柱穴で抜取穴を確認しており、西側柱筋では柱を西側に抜き取った様子がわかる。東北隅の柱穴に径25㎝の柱根が遺存する。柱穴の重複関係があり、Ⅳ期の建物SB4242より古い。正殿SB5000に対するⅢ-C期の東脇殿と考えられる。

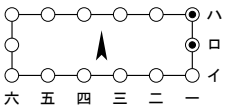


掘立柱建物SB4333　第46次調査区で検出した、桁行7間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行20.5m×梁行5.4m。柱間寸法は桁行2.93m、梁行2.7m。柱穴は一辺0.9～1.3mの隅丸方形。深さは検出面から30～60㎝を測る。妻柱の柱穴は浅く、底部の痕跡が残るのみである。柱穴の埋土は灰色砂が交じる粘質土で、北西隅の柱穴に柱痕跡が灰色の粘土として残る。同時期で同じ桁行長のSB4330・4331・4332と比べて梁行が狭く、規格が異なる。柱穴の重複があり、Ⅱ期の建物SB4248より新しい。SB5000と北側柱筋を揃え、5.9m（約20尺）隔てて東に並ぶ。Ⅲ-C期の東副殿と考えられる。

東西塀SA4731　第47次調査区と第50次調査西区で検出した、掘立柱東西塀。12間分47.4mを確認した。柱間寸法はかなり不揃いで3.1～5.1mと幅があるが、3.8m前後となる箇所が比較的多い。柱穴は東西に長い不整形な長方形または楕円形で、長辺が0.6～1.0m。深さは検出面から30～50㎝を測る。埋土に土器片や20㎝程度の石の交じる穴がある。明確な抜取穴や柱痕跡、柱根は確認していない。六条条間路北側溝SD4139に重複し、それより新しい。また、SA4731の東端の柱穴は、Ⅲ-B期の南北塀SA4730の南に開く門SB4726の柱穴より新しい。坊の南北中心線から、18.5m北に位置し、Ⅲ-C期の中心区画をさらに南北に分ける塀と考えられる。Ⅳ期まで存続した可能性がある。

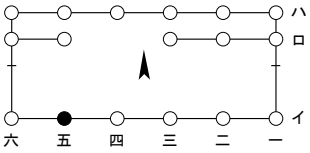


掘立柱建物SB4738　第47次調査区と第50次調査西区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。建物規模は桁行12.4m×梁行5.7m、柱間寸法は桁行が2.42m、梁行が2.85mである。柱穴は一辺0.8～1.0mの隅丸方形。深さは検出面から40～70㎝を残す。柱穴の底の標高は比較的揃い、妻柱が特に浅いということはない。西妻の柱穴に径15㎝の柱根が残る。Ⅲ-B期のSB4737と西妻をほぼ同位置とし、桁行を縮小して建て替えたものと考えられ、柱間寸法もわずかずつ狭い。柱穴の重複関係があり、Ⅲ-A期の東西塀SA4732、南北塀SA5005および掘立柱建物SB4737より新しい。Ⅲ-C期の正殿北側区画の建物。

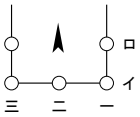


掘立柱建物SB4780　第47次調査区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行12.0m×梁行4.1m、柱間寸法

は桁行が2.4m、梁行が2.05mである。柱穴は一辺0.8m前後の隅丸方形で、埋土は暗褐色の砂質土が主体である。柱穴の深さは穴によってばらつきがあり、検出面から25～60cmを測る。ハ一とロ一の柱穴には柱痕跡が暗灰色の粘土として残り、柱径は15cmほどである。東妻柱筋（一列）に内郭東限の区画塀SA4729が取り付く。Ⅲ-B期のSB4789と南側柱筋を揃え、内郭東限の塀とともに東方に移設したものとみられる。Ⅲ-C期の正殿北側区画の建物。



掘立柱建物SB4800　第47次調査区と第50次調査西区で検出した、桁行5間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行17.5m×梁行7.0mで、柱間寸法は桁行・梁行とも3.5mである。北1間の中央に東は2間分、西は1間分柱穴が並び、間仕切りであった可能性が考えられる。柱穴は一辺0.9～1.3mの隅丸方形で、深さは検出面から40～70cmを測る。妻柱の柱穴は、大きさは一辺0.8～1.0mとやや小さめだが、深さは60cmが残る。北入側柱筋（ハ列）の間仕切りと考えられる柱穴の大きさは、側柱列の柱穴と同じ程度の大きさである。イ五の柱穴には、径25cmの柱根が残る。建物の東西中軸線は坊の心から26.5m（約90尺）東にあたり、SB4333の中軸線とほぼ一致し、南側柱筋はSB4333の北側柱筋から42.3m（約145尺）北に位置する。Ⅲ-C期の正殿北側区画での、中心的な建物とみられる。



掘立柱建物SB5035　第50次調査西区で検出した、桁行2間以上×梁行2間の掘立柱南北棟建物。南妻の柱穴3基と、1間北で東西両側柱を検出しており、北妻は調査区外へ延びると考えられる。柱間寸法は桁行が2.7m、梁行が3.15mである。柱穴は東西に長い隅丸長方形で、長辺が1.2～1.3m。深さは検出面から20～30cmを測る。西南隅の柱穴はⅢ-A期の塀SA5005の柱穴を壊しており、それより新しい。西側柱

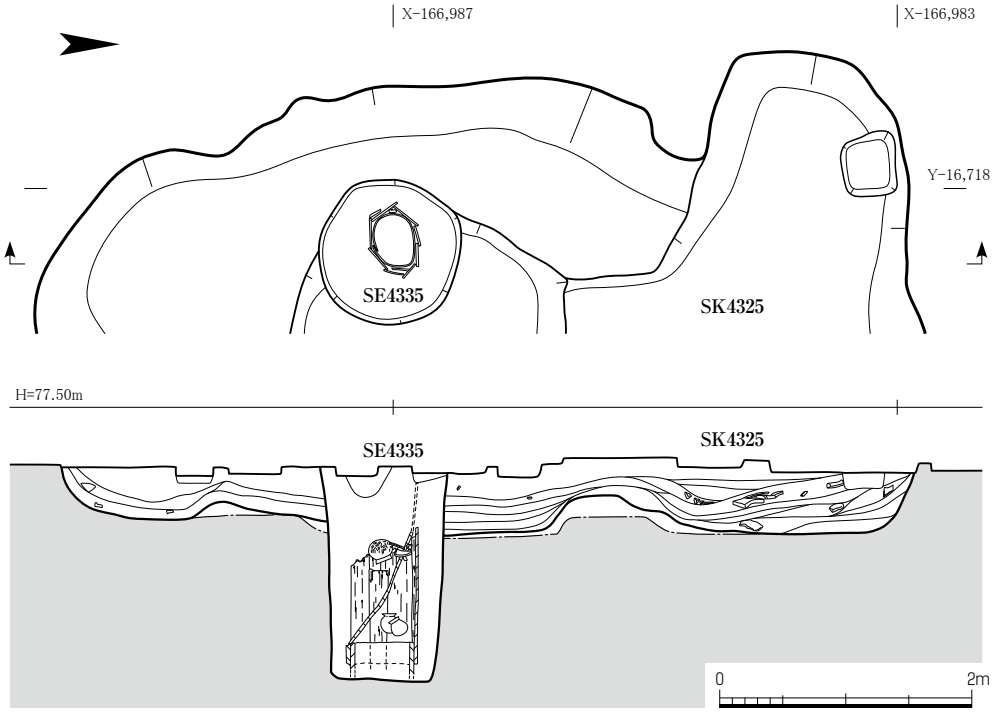


Fig. 51　SK4325・SE4335平面図・断面図　1:60

筋をSB4738の西妻柱筋と揃え、南妻柱筋はSB4780の棟通りに揃える。Ⅲ-C期の正殿北側区画の建物。

南北塀SA5025　第50次調査西区で検出した南北方向の掘立柱塀。6間分、12.5mを確認した。柱間寸法は南端の2.4mを除いて1.9～2.1mである。柱穴は隅丸方形または不整形な楕円形で、大きさはいずれも0.6m前後である。深さは検出面から20cmを測る。柱筋は北で東に0.7°振れる。SB4800の西約11.7mにあり、SB4738・5035の西妻柱筋と揃える。Ⅲ-C期の正殿北側区画内部の塀。

井戸SE4335（Fig. 51）　第46次調査区で検出した縦板組の井戸。SK4325に重複して掘削している。掘方は径1.1mの円形で、検出面より深さ1.8mを測る。掘方底に長径50cmの小判形の曲物を長軸を東西方向にして埋設し、その外側に縦板材8枚をつき合わせながら組む構造である。縦板は幅20cm程度で、長さは最大1.1mが残存する。8枚を基本的に時計回りにつき合わせながら巡らせ、その内側と外側にやや幅狭の補助の板を3枚入れる。南側の縦板2枚は曲物の天端で折れ、井戸内に倒れ込む。井戸内部からは、完形品に近い土師器甕や須恵器壺などが出土した。井戸廃棄後のくぼみには土器などを廃棄し、山土を含む土で埋め立てたものとみられ、倒れ込んだ縦板上の埋土から藤原宮期の土器が出土した。

井戸SE4740（Fig. 52～54）　東西大溝SD4130の南岸で検出した方形横板組の井戸。井戸枠の大きさは一辺0.9m、遺構検出面からの深さは3.6m。横板材12段分で高さ約3mが残存する。角材の隅柱を立て、底から0.5～0.6mの高さで背違いに横桟を枘差しする。横板は木組みをせず隅柱の外側にあてて、粘土で丹念な裏込めをしながら順に積み上げる。また、最下段の横板は内外に人頭大の石を置き補強し、井戸枠上端は人頭大の石で押さえていたとみられる。

掘方は南北4.8m、東西6.2mの不整円形。検出面からの深さ0.3～0.6mのところで径4mの円形に狭まり、そこからさらに漏斗状に狭まり、底部では一辺1.7mの方形になる。掘方の埋土は、底から0.7～1mの高さまでは青灰色砂礫である。横板の3段目より上は、横板の周囲に灰色粘土を巻きつけるようにして押さえ、その外側を灰褐色砂礫で埋めるという工程を繰り返しながら積み上げる。底から2mより上は円錐形にこの互層を積み上げ、周囲を淡褐色砂質土で埋めている。また、掘方の内側、井戸本体の周囲に改修時のものとみられる穴を検出している。一辺2.8mの隅丸方形で、深さは0.4m、埋土は暗褐色砂質土である。その際に、井戸の周囲に石を敷き詰め、舗装としている。

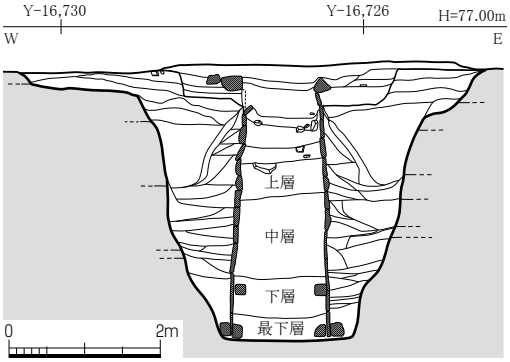


Fig. 52　SE4740断面図　1:100

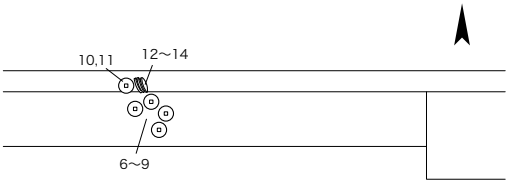


Fig. 53　SE4740和同開珎出土状況略図
（番号はPh. 158・159に対応）

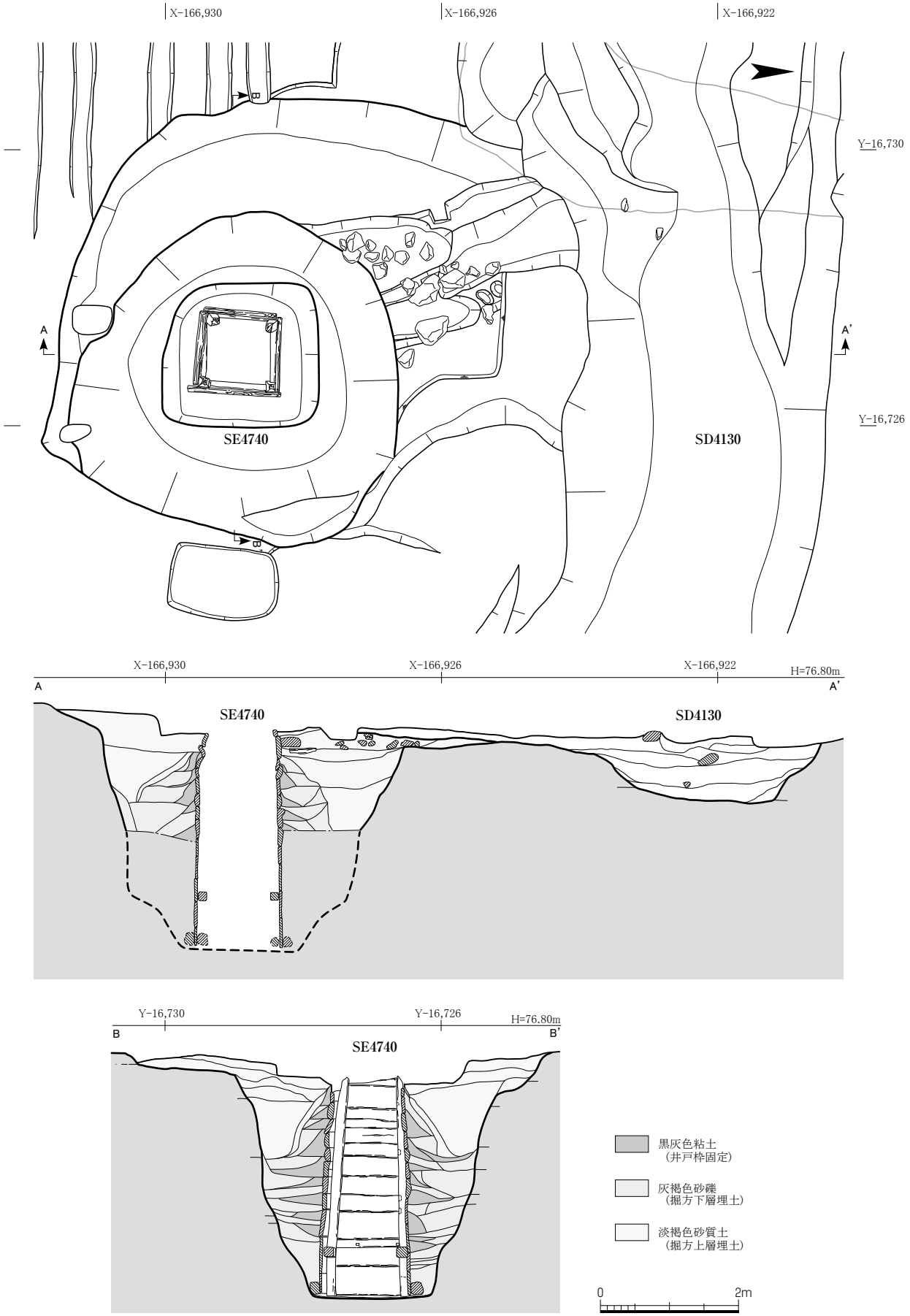


Fig. 54　SE4740平面図・断面図　1:80

井戸内の遺物は上層、中層、下層、最下層の４層に分けて取り上げた（Fig. 52）。最下層は灰褐色砂礫で、土器、木製品、金属製品を含み、土師器甕が特に多く出土した。下層は褐色砂質土で、多量の土器と木製品を含み、「香山」の墨書がある土師器椀や皿が９点出土した。中層は砂交じりの褐色粘質土で、多量の土器と木製品を含み、記号の墨書がある土器が５点出土した。上層は青灰色から暗褐色を呈する粘質土で、土器や漆器が出土したが比較的遺物は少ない。10世紀前半の黒色土器を含む。また、最下層から無文銀銭１点、最下層および下層から和同開珎27点が出土している。和同開珎のうち９点は井戸北辺の横桟に置かれた状態で、７点はそのすぐ内側の埋土から出土している（Fig. 53）。

SD4130との関係は、井戸掘方の北側埋土をSD4130の南肩が掘り込んでいるという所見で、SE4740の掘削が先とみることもできる。しかしSD4130の埋土は最終的に廃絶する際の堆積土であり、これをもって両者の先後関係を判断する根拠にはなり難い。出土遺物等から、藤原京期に掘削され、奈良時代末期にはほぼ埋没し、平安時代中頃に最終的に廃絶したとみられる。

大土坑SK4327　第46・47次調査区にかけて検出した大規模な土坑。南北17.5m、東西12.0mの隅丸長方形を呈する。底面は比較的平らで、北側に一部深い箇所がある。深さは検出面から30cmを測り、北側の深い部分で40cmである。埋土は上層から炭交じり黄褐色砂質土、炭交じり淡灰色粘質土、黄色粘土交じり黄褐色粗砂の順でおおよそ水平に堆積しており、顕著な滞水を示す状況はなく、一気に埋め立てられたものとみられる。埋土からは飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器がまとまって出土しており、他には古代の道具瓦や平瓦も出土している。西辺北側で六条条間路南側溝SD4311、北東隅でⅢ-Ｃ期の東西溝SD4119と交わるが、両者との前後関係は明らかにすることができなかった。Ⅲ-Ｂ期の廃棄土坑であろう。

c　外郭の遺構（Pl. 2～5・8，Ph. 10・22・26・27・33・37・39・41）

東西大溝SD4130（Fig. 55）　第53次調査北区から第45次調査中央区、第47次調査区、第50次調査西区へ西流する、東西方向の大規模な素掘溝。調査区を横断し、合わせて約120m分を確認した。北岸はほぼ直線状だが、南岸は第47次調査区以西で大きく蛇行している。溝幅はおおよそ西側ほど広くなる傾向にある。第53次調査北区の溝東端近くでは2.3m、第45次調査中央区西壁では4.5m、その西約25mでは6.0mを測る。第47次調査区のSE4740の北では3.0mと狭くなるが、西方では幅を広げていき、第50次調査区西壁では11mに達する。溝底には凹凸があるものの、全体としては底の標高は東から西に向けて低くなっており、第53次調査北区の溝東

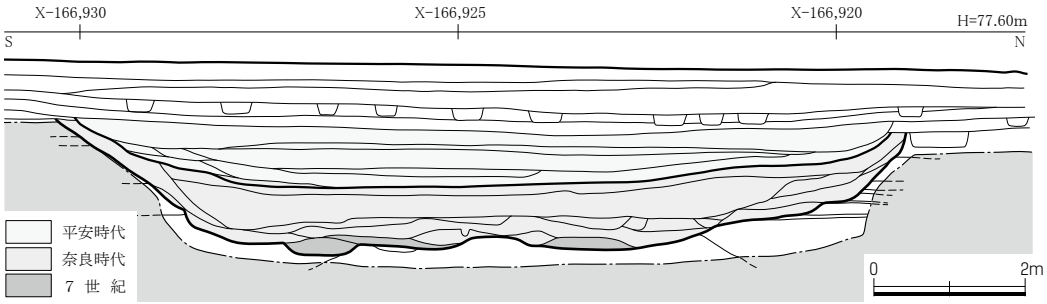


Fig. 55　SD4130断面図（Y-16,752）　1:100

端近くでは75.2m、第47次調査区東壁では75.0m、第50次調査区西壁では74.7mである。第47次調査区西端付近で、北岸から東に向かってＬ字形に並ぶ杭列を検出した。杭は径5㎝程度の半円形断面で、後述する上層に覆われており、中層から下層に打ち込まれていたとみられる。検出位置が中世大溝SD4755との交点付近にあたるが、SD4755より広い範囲から杭は検出されていることからも、SD4755に関する遺構ではなく、SD4130に伴った堰等の可能性が考えられる。

埋土の堆積状況は場所により異なるが、大きく3層に分けることができる。上層は褐色を呈する粘質土で、溝が最終的に廃絶した時の埋土である。中層は青灰色を呈する細砂や粘質土で、ところにより粘質土と砂が交互に堆積する。溝が機能していた時の滞水により堆積した層とみられる。下層は灰色を呈する粗砂または砂礫からなる層である。遺物はいずれの層からも出土しており、瓦、土器、木製品、木簡、金属製品、種実、動物骨など多岐にわたる。出土土器の年代により、下層は藤原京期、中層は奈良時代、上層は平安時代以降に該当する。遺構の方位は北岸で計測すると、東で南に3.0°振れる。後述するSD4131と橋SX4134、およびSD4139・4132とともに、藤原京造営が本格化した際に設けられたとみられる。

斜行南北溝SD4131（Fig. 56）　第50次調査東区西辺から第45次調査中央区にかけて北流する南北方向の素掘溝。合わせて約40m分を確認した。北端はSD4130に流れ込み、その南に後述する橋脚SX4134や護岸施設SX4133を設ける。さらにその南でSD4132が東から合流する。検出面での幅は2.5m、検出面からの深さは80㎝を測る。断面形状は、検出面から深さ約50㎝までは緩やかな法面をもった逆台形で、それより下は幅60㎝、深さ約30㎝の長方形で、護岸施設SX4133を伴う。溝底はSD4132との合流点から北に4mのところで20㎝段を付けて掘り下げており、さらに北に向かい緩やかに傾斜する。北端で溝底の標高は73.7m、検出面から底まで90㎝を測る。SD4132との合流点から南では、遺構面の削平が著しい。第50次調査東区と第45次調査中央区間の未調査地で消滅する様で、南端の様相は不明である。SD4130と同時に掘削し、SD4132より開削は先と考えられる。埋土は下層と上層に分かれ、それぞれ当初の南北溝の時期と、後に東西溝SD4132が接続する時期に対応する。敷地東半の水を、SD4130に向けて排水するための溝であろう。

護岸施設SX4133（Fig. 56）　SD4131の内部にある板と杭による護岸施設。SD4132との交点から北に、約10mにわたり検出した。SD4131の法面下部を20～30㎝垂直に掘り込み、これに横板をあてて杭を打ち込んだものである。両岸で横板にあたる木材と、径5～10㎝程度の灰色粘土として残る杭の痕跡を検出した。横板は長さ1m～2.3m、厚さは薄いもので2㎝程度である。

橋脚SX4134（Fig. 56）　SD4131の両肩で検出した柱穴4基。SX4133の上部に位置し、SD4131にかかる橋の橋脚になると考えられる。柱穴はSD4131の振れにあわせて、南北6.3m、東西2.4mの平行四辺形に配置する。柱穴は0.4～0.8mの円形で、深さは溝肩から40㎝ほどである。SD4130とSD4132間を、通路として利用していたことを示すものであろう。

東西溝SD4132　第53次調査北区から第45次調査中央区へ西流する東西方向の素掘溝。合わせて23m分を確認した。やや蛇行し、幅は1.0～1.5m。断面形状は方形に近く、深さは0.6mを測る。西端で溝底の標高は73.3mである。溝の底部には暗褐色の粘質土が10㎝弱の厚さで堆

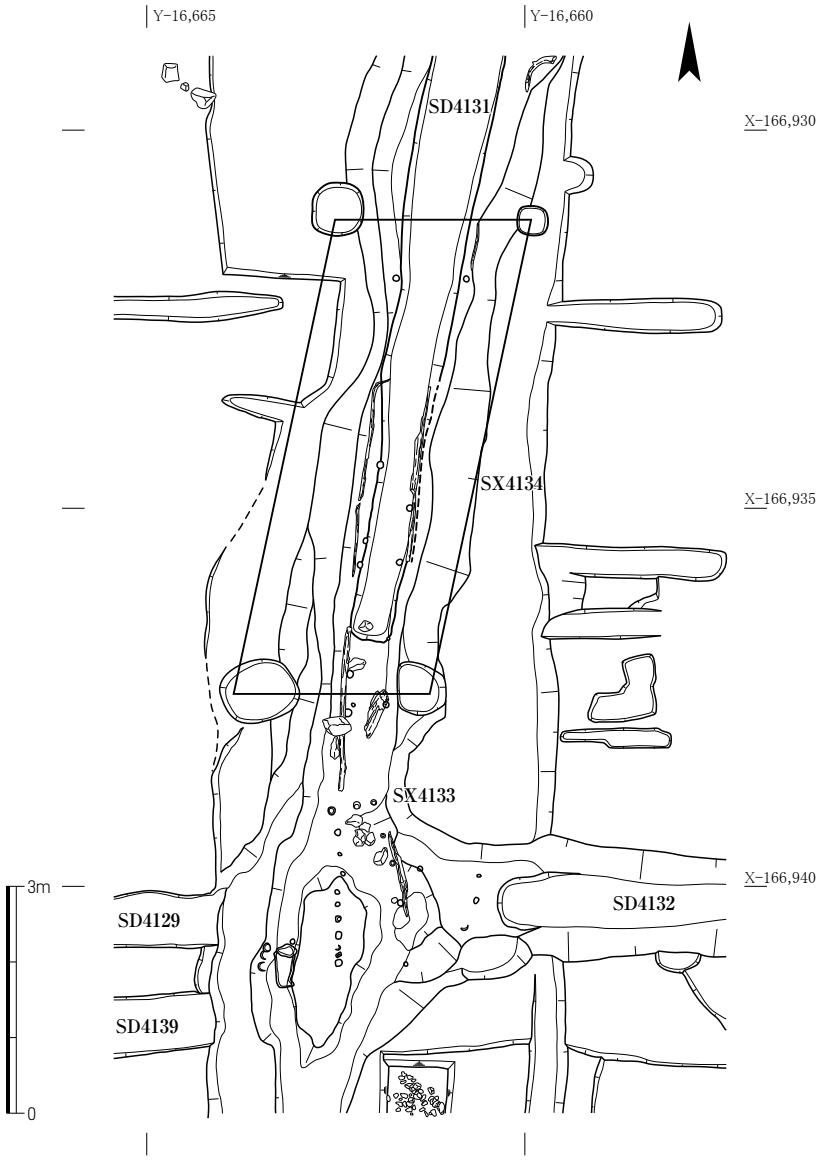


Fig. 56　SD4131・SX4133・4134平面図　1:100

積しており、あまり激しい水流がなかったことがうかがえる。開削はSD4131より後、廃絶は同時とみられる。SD4130と平行し、SD4130の南肩からSD4132の溝心までの距離は約13mである。

東西溝SD4119　第47次調査区から第45次調査中央区にかけて検出した東西方向の素掘溝。44m分を確認した。西端はSK4327の北東隅に接続し、東端はⅢ-B期の南北溝SD4131から約10m東で遺構面の削平のため途切れる。検出面での幅は0.4～1.4m。断面形状は方形に近く、検出面からの深さは25～40cmを測る。SK4327との接続部は一体となって検出しており、重複関係は把握できていない。SD4131・4135とは遺構の重複関係があり、SD4131より新しく、SD4135より古いとされるが、SD4131とは並存する時期があったとも考えられる。門SB4725から東へ延びる、Ⅲ-C期の通路南側溝とみられる。

東西溝SD4129　第45次調査中央区で検出した東西方向の素掘溝。長さ約18m分を確認し、東端は南北溝SD4131上で途切れる。幅は0.5～0.9m、深さは検出面から15～55cmを測る。遺構の

重複関係があり、SD4131より新しい。飛鳥Ⅱの特徴を示す須恵器が出土したが、遺構の年代を示すものではない。門SB4725から東へ延びる、Ⅲ-C期の通路北側溝とみられる。

井戸SE5950（Fig. 57）　第53次調査中区で検出した素掘りの井戸。検出面での形は南北2.0m、東西1.6mの楕円形で、深さ0.9mまではすり鉢状の土坑の様相を呈する。その下は、1.0×0.6mの隅丸長方形で、深さ1.6mをほぼ垂直に掘り下げる。深さは検出面から2.5m。井戸枠の部材や抜取痕跡はみられない。埋土は、上段の土坑状の部分は黄褐色の粘質土と暗灰褐色の粗砂が互層となり、検出面から0.5mの位置で土師器甕が倒立した状態で出土した。また、上段の最下層の暗灰褐色粗砂からは墨書のある土師器杯A（Pl. 33-454・455）が出土している。下段の垂直に掘り下げた部分は、暗褐色土塊が交った地山由来の黄褐色粘質土で一気に埋め立てられており、遺物も出土していない。最下層には細砂が薄く堆積する。断ち割り調査の際、底が砂層に達したにもかかわらず、湧水が非常に少なかった。このことから、実際には井戸として使用されずに埋め立てられた可能性も考えられる。Ⅲ-C期の井戸。

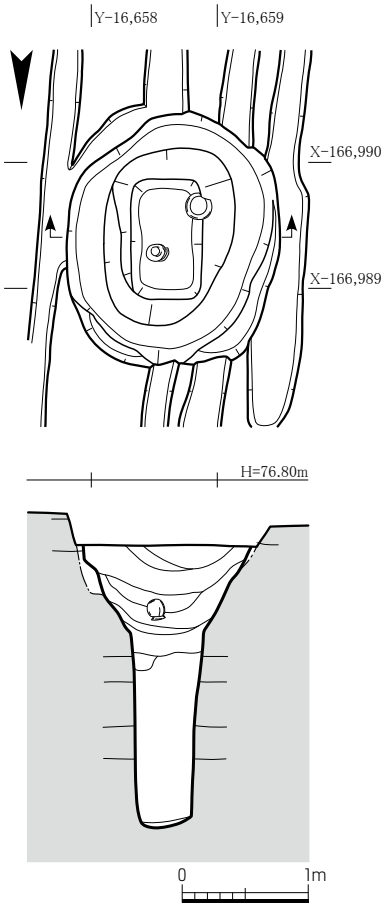


Fig. 57　SE5950平面図・断面図　1:60

d　藤原京廃絶期の遺構（Pl. 4・5・8・9，Ph. 8・36・37・39）

東西塀SA4111・南北塀SA4110・東西塀SA5090　第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した、「匚」形をなす掘立柱塀。北辺にあたる東西塀SA4111は5間分9.2mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で1.84m。柱穴は一辺60～80cmの隅丸方形、深さは検出面から30cmを測る。東端の柱穴には柱痕跡が遺存する。西端でSA4110の北端と接続する。柱筋は東で4.3°南に振れる。西辺にあたる南北塀SA4110は14間、28.9mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で2.06m。柱穴は隅丸の方形または長方形で、長辺は60～90cm、深さは検出面から30～40cm。南端から1・2・3・8基目と北端から2基目の柱穴で、柱痕跡を確認した。柱径は15cm程度。柱筋は北で東に5.0°振れる。南辺にあたるSA5090は5間分10.3mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で2.06m。柱穴は隅丸長方形で、長辺は70cm程度。深さは検出面から30cm。西端の柱穴で柱痕跡を確認した。西端でSA4110の南端と接続する。柱筋は東で南に2.8°振れる。3条の塀により区画施設をなすと考えられるが、内部に建物などの同時期遺構を確認できておらず、性格は不明である。

東西塀SA4121・南北塀SA5080・東西塀SA5081・入口SX5082・東西塀SA5083　第53次調査北区、第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した、「匚」形をなす掘立柱塀。先述したSA4111・4110・5090による区画の外側を巡り、西と南には素掘溝SD4135・5084を伴

う。北辺にあたる東西塀SA4121は、11間分24.0mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で、2.18mを測る。柱穴は40～80cmの隅丸方形または円形。深さは検出面から15cm。SA4111の2.4m北側に位置する。柱筋は東で南に4.3°振れる。西辺にあたるSA5080は16間で長さ38.8m。柱間寸法は最大2.6mとなるところもあるが、おおよそ2.4mである。柱穴は50～70cmの隅丸方形または円形。深さは検出面から20～35cm。SA4110からの距離は北端で7.6m、南端で8.4m。柱筋は北で東に6.2°振れる。

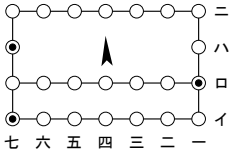
南辺は東西塀SA5081とSA5083の間に、入口SX5082が開く。西側の塀SA5081は4間で長さ9.6m。柱間寸法は2.4m。東側の塀SA5083は2間分5.0mを確認した。柱間寸法は2.5m。入口SX5082は柱間心々で4.2m。柱穴は50～60cmの隅丸方形で、深さは検出面から20～30cm。SA5081の西端から3基目の柱穴に、柱痕跡が粗砂交じりの灰褐色粘質土となり遺存する。柱径は15cmで、柱痕跡の部分が柱掘方の底より5cmほど沈み込む。SA5081の西端で、SA5080の南端に接続する。SA5090の8.2m南に位置する。柱筋はSA5081が2.3°東で南に振れ、SA5083は3.5°東で南に振れる。

東西塀SA5085　第50次調査東区で検出した掘立柱東西塀。6間分、13.7mを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で2.28m。柱穴は隅丸方形で一辺が45～70cm。深さは検出面から20～30cm。SA5081の3m北を並行し、西端はSA5080の南端から2基目の柱穴に近接する。柱筋は東で南に3.0°振れる。

南北溝SD4135・東西溝SD5084　第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した、L字形の素掘溝。SD4135は長さ29.6mを確認した。幅は40～90cm、深さは検出面から10～30cm。南端でSD5084に接続する。北端は東西溝SD4132の位置で途切れるが、関係は不明。溝底の標高は第50次調査東区では北に向かうにつれ低くなるが、第45次調査中央区では溝底が高くなる部分があり、機能時に水流があったかは不明である。SA5080の0.8m西に位置する。方位は北で東に3.5°振れる。南辺にあたる東西溝SD5084は3.7m確認した。幅は40cm、深さは10cm程度と非常に浅い。SA5081の1.0m南に位置し、SA5081の西から1間で途切れる。方位は東で南に0.6°振れる。

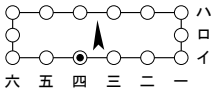
B　奈良時代（Ⅳ期）の遺構（Pl. 2～4・6・7・10・11, Ph. 6・13・16・18・19・28・30・34）

藤原京域では平城京遷都とともにほとんどの施設が廃絶し、遺構の展開もみられなくなる。しかし左京六条三坊ではSD4130をはじめ、奈良時代の遺物が多量に出土し、活発な活動の痕跡が認められることが特徴的である。遺構もその活動を反映して多数検出しており、配置は藤原京期から一変する。なお、井戸SE5920については475頁の別表1に概要を記す。



掘立柱建物SB4350　第46次調査区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行6間×梁行2間の身舎の南側に1間の廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行12.4m×梁行4.8m、廂の出は2.4mである。柱間寸法は桁行が2.07m、梁行が2.4mとなる。身舎の柱穴は一辺0.8～1.2mの隅丸方形または円形。深さは検出面から40～65cmを測る。妻側の柱のほうがやや深い傾向にある。廂の柱穴は0.6～0.9mの隅丸方形で、深さは25cm。身舎の柱穴より小さく、浅い。身舎柱のロ一・ハ七と廂柱のイ七の柱穴には、黄灰色粘質土または灰色微砂の柱痕跡が遺存する。ロ一の柱穴

では、柱痕跡が柱穴の底からさらに10㎝ほど沈み込んでいる。柱痕跡から推定される柱径は15～20㎝ほどである。遺構の重複関係より、Ⅲ-Ａ期のSA4284およびⅢ-Ｃ期のSB4333より新しい。後述するように、この時期には塀SA4355・4356および溝SD4357・4358による区画があり、区画とSB4350の東西中軸がほぼ揃う。SB4350はこの区画の正殿であったとみられる。

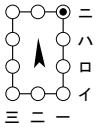


掘立柱建物SB4351　第46次調査区で検出した桁行５間×梁行２間の掘立柱東西棟建物。建物規模は桁行11.2ｍ×梁行3.0ｍで、柱間寸法は桁行が2.24ｍ、梁行が1.5ｍである。柱穴は一辺0.6～0.8ｍの隅丸方形。深さは検出面から35～60㎝を測る。SB4350より規模が小さく、柱穴も小さい。イ四の柱穴には灰色粘質土の柱痕跡がみられ、その中心には木質も一部遺存する。柱痕跡から推定される柱径は、15㎝ほどである。遺構の重複関係より、Ⅲ-Ａ期のSB4290およびⅢ-Ｃ期の SB4330より新しい。SB4350の６ｍ南に西妻を揃えて配置することから、その前殿であったと考えられる。

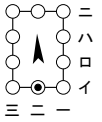
東西塀SA4355・南北塀SA4356・東西溝SD4357・南北溝SD4358　第46次調査区で検出した、東西塀SA4355と南北塀SA4356、および塀の外側の東西溝SD4357と南北溝SD4358が一連となったＬ字形の区画施設。東西塀SA4355は10間分、長さ36.7ｍを確認した。西端の柱穴がSA4356と接続する。柱間寸法は3.67ｍ。柱穴は一辺40～60㎝の隅丸方形または円形。深さは検出面から10～40㎝を測る。東方は遺構面の削平が著しく、SD4357の続く範囲までは塀が延びていた可能性もある。柱痕跡が西端から１・６・８基目および東端の柱穴で、灰色の粘質土として残る。柱痕跡から推定される柱径は17㎝前後である。南北塀SA4356は８間分、長さ29.5ｍ分を確認した。南端は調査区外に延びる。柱間寸法は3.69ｍ。柱穴は一辺40～60㎝の隅丸方形。深さは検出面から20㎝を測る。柱痕跡が南端から１・２基目の柱穴で、黄灰色や黒灰色の粘質土として残る。柱痕跡から推定される柱径は20㎝弱である。

東西溝SD4357は、SA4355の0.7ｍ北側に位置する東西方向の素掘溝。東端で４ｍ北折して途切れる。東西方向の長さは47ｍで、やや蛇行する箇所もあり、幅は0.5～1.4ｍを測る。断面は法面が緩い傾斜をなす。検出面からの深さは、最も深い場所で約30㎝、東端では浅く約10㎝である。溝底の標高は中央が最も低く、両端に向かうに従い高くなり、その差は最大で30㎝程度である。

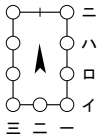
南北溝SD4358は、SA4356の0.7ｍ西側に位置する南北方向の素掘溝。南端は調査区外に延びる。長さ30.6ｍ分を確認した。幅は南端で0.5ｍ、北端で0.8ｍを測り、最大1.1ｍとなる部分がある。検出面からの深さは南端で10㎝、北端で20㎝を測る。溝底の標高は南に向かうに従い高くなり、溝の両端で25㎝の差がある。SD4357・4358ともに、溝底の標高が低くなる箇所に排水できる落水口がなく、流水のない空溝であったとみられる。遺構の重複関係より、SD4358はⅢ-Ａ期のSD4285より新しい。



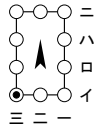
掘立柱建物SB4727　第47次調査区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.2ｍ×梁行3.2ｍ、柱間寸法は桁行が1.73ｍ、梁行が1.6ｍである。柱穴は40～60㎝の隅丸方形または不整形な楕円形で、深さは検出面から25～40㎝を測る。ニ一の柱穴に暗褐色粘質土の柱痕跡がある。痕跡から推定される柱径は15㎝程度である。直接の重複関係はないが、六条条間路南側溝SD4311と並存しない。



掘立柱建物SB4728　第47次調査区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.0m×梁行3.2m、柱間寸法は桁行が1.66m、梁行が1.6mである。柱穴は40～70㎝の隅丸方形または不整形な楕円形で、深さは検出面から40～55㎝を測る。南妻柱の柱穴に、暗褐色粘質土の柱痕跡がある。痕跡から推定される柱径は10㎝程度である。遺構に重複関係があり、六条条間路南側溝SD4311より新しい。

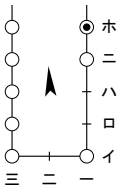


掘立柱建物SB4560　第46次調査区で検出した桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行6.0m×梁行3.4m、柱間寸法は桁行が2.0m、梁行が1.7mである。柱穴は50～90㎝の隅丸方形または不整形な楕円形で、深さは検出面から15～35㎝を測る。南妻柱はやや小さく、北妻柱は削平されたためか検出していない。直接の重複関係はないが、六条条間路南側溝SD4311とは並存しない。

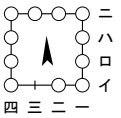


掘立柱建物SB4987　第50次調査西区で検出した桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.4m×梁行3.2m、柱間寸法は桁行が1.8m、梁行が1.6mである。柱穴は40～60㎝の隅丸方形または不整形な楕円形で、深さは検出面から30～40㎝を測る。イ三の柱穴に暗黄灰色粘質土の柱痕跡が残る。痕跡から推定される柱径は15㎝程度である。遺構に重複関係があり、六条条間路南側溝SD4311より新しい。

SB4987・4560・4728・4727の４棟はほぼ同じ規模で、また北妻柱筋をおおよそ揃えて配置される。４棟の間隔はそれぞれの側柱筋間の距離で、SB4987とSB4560の間は９m、SB4560とSB4728の間は3.4m、SB4728とSB4727の間は3.2mである。



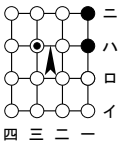
掘立柱建物SB4787　第47次調査区で検出した、桁行４間以上×梁行２間の掘立柱南北棟建物。北妻は調査区外に延び、南妻柱はⅥ期の井戸SE4790により破壊されて検出できないため、梁行は３間であった可能性もある。建物の規模は桁行8.4m以上×梁行4.9m。柱間寸法は桁行2.1m、梁行は２間とすれば2.45mとなる。柱穴は隅丸長方形または隅丸方形で、長辺の長さは0.6～1.0mである。深さは検出面から30～70㎝とややばらつきがあるが、穴底の標高はほぼ同じである。ホ一の柱穴に柱痕跡が残り、柱径は25㎝程度であったことがわかる。遺構の重複関係があり、Ⅲ-Ｂ期の建物SB4789より新しく、Ⅵ期の斜行東西溝SD4791と井戸SE4790より古い。南側に1.4mの間隔をあけて梁行が同規模のSB4786が側柱筋を揃えて並び、一連の施設と考えられる。



掘立柱建物SB4786　第47次調査区で検出した、桁行３間×梁行３間の掘立柱建物。建物の規模は桁行4.8m×梁行4.8mで、ほぼ正方形を呈し、柱間寸法は桁行、梁行とも1.6mである。柱穴は隅丸長方形または隅丸方形で、長辺の長さは0.6m、大型のもので0.9mである。深さは検出面から25～35㎝とやや浅い。SB4787と一連の施設とみられ、SB4786が小規模で柱穴も小型であることから、SB4787が主屋でSB4786が付属屋とみられる。

掘立柱建物SB4150　第45次調査中央区で検出した、桁行２間×梁行１間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行3.8m×梁行1.3m、柱間寸法は桁行が1.9m、梁行が1.3mである。柱穴は一辺50～80㎝の隅丸方形で、埋土は灰褐色の粘質土が主体である。柱穴は削平のためか非常に浅く、検出面から20～25㎝を残すのみである。Ⅲ-Ａ期の建物SB4140と柱穴の重複はないが遺構が重

複している。建物の方位は北で東へ5°振れる。



掘立柱建物SB5050（Fig. 58）　第50次調査西区で検出した、総柱の掘立柱南北棟建物。桁行３間×梁行３間、建物の規模は桁行6.6m×梁行5.2m。柱間寸法は桁行が2.2m、梁行が1.73m。柱穴は隅丸方形または楕円形で、長辺の長さが0.9～1.4mである。側柱の柱穴より内部の柱穴のほうが小型である。深さは検出面から30～70cmを測る。ハ一・ニ一の柱穴には柱根が残る。ハ一の柱根は柱径35cmで、中心部と周囲が粘土化している。ニ一の柱根は大半が粘土化しており、木質が一部遺存する。柱径は約35cmとみられる。またニ一の柱根は柱穴底より17cm沈みこむ。ハ三の柱穴には柱痕跡が木質交じりの暗灰色粘質土となり遺存する。柱穴から出土した土器は奈良時代中頃のものが多いが、抜取穴からは平安時代初頭の土器が出土し、その時期に廃絶したとみられる。柱径が太く、総柱建物であることから、倉庫であったとみられる。

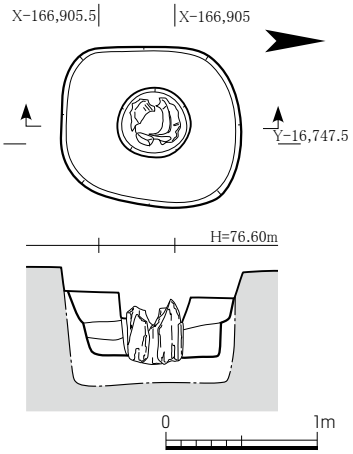


Fig. 58　SB5050柱穴（ハ一）
平面図・断面図　1:50

土坑SK4365　第46次調査区で検出した土坑。SB4340の南約９mに位置する。東西0.6m、南北0.8mの楕円形を呈する。埋土には20～30cm大の花崗岩片と、奈良時代の土器を少量含む。

C　藤原京造営以前の遺構

藤原京造営以前の遺構は、藤原京造営直前にあたる７世紀中頃～後半の遺構と、古墳時代の遺構に大きく分かれる。

i　７世紀中頃～後半（Ⅱ期）の遺構（Pl. 4・6～8・10・11, Ph. 13・14・16～18・40・41）

７世紀中頃～後半には第46次調査区を中心に小型の掘立柱建物が建てられるが、その配置に規則性はない。建物の方位は北で東に2°～7°振れる。

東西溝SD4179　第45次調査中央区で検出した東西方向の素掘溝。長さ22.5mを確認した。幅は50～90cm、深さは検出面から最大25cmほどである。飛鳥Ⅱ～Ⅲの特徴をもつ土器が少量出土した。

掘立柱建物SB4249　第46次調査区、第53次調査中区で検出した、桁行２間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行2.8m×梁行2.5m、柱間寸法は桁行が1.4m、梁行が1.25mである。柱穴は大きさ40～60cmの隅丸方形、または不整形の円形や方形。深さは検出面から25～35cmを測る。北側柱列中央の柱穴に残る暗灰褐色粘質土の柱痕跡からみると、柱径は10cm以下と、かなり細い。建物の方位は北で東へ2.2°振れる。

掘立柱建物SB5975　第53次調査中区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行4.8m×梁行3.4m、柱間寸法は桁行が1.6m、梁行が1.7mである。柱穴は隅丸方形または楕円形で、大きさは側柱が35～70cm。深さは検出面から10～25cm、東南隅の柱穴のみ55cmである。北東隅、南側柱の西妻から２基目、北側柱の西妻から２基目の計３基の柱穴に柱

痕跡が残る。建物の方位は東で南に7.0°振れる。

掘立柱建物SB5970　第53次調査中区で検出した、桁行２間×梁行１間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行4.2m×梁行3.1mで、桁行の柱間寸法は2.1mである。柱穴は40～70cmの隅丸方形または楕円形で、深さは検出面から10～25cm。南妻の柱穴２基に柱痕跡が残る。Ⅵ期の建物SB5971と柱穴どうしの重複関係はないが遺構の範囲が重複しており、同時並存はしない。建物の方位は北で東に7.2°振れる。

掘立柱建物SB4240　第46次調査区で検出した、桁行４間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行7.8m×梁行3.3m、柱間寸法は桁行が1.95m、梁行が1.65mである。柱穴は一辺0.7～0.9mの隅丸方形。柱穴は非常に浅く、検出面から25cmを残すのみである。建物の方位は、北で東へ4.3°振れる。

掘立柱建物SB4241　第46次調査区で検出した、桁行４間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行8.4m×梁行3.9m、柱間寸法は桁行が2.1m、梁行が1.95mである。柱穴は大きさ0.5～0.9mの隅丸方形または不整形な楕円形。柱穴は非常に浅く、検出面から15～25cmしか残らない。Ⅲ-Ｃ期の建物SB4330と遺構の重複関係があり、それより古い。建物の方位は北で東へ4.2°振れる。

掘立柱建物SB4242　第46次調査区で検出した、桁行５間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行9.8m×梁行4.4m、柱間寸法は桁行が1.96m、梁行が2.2mである。柱穴は一辺0.6～0.9mの隅丸方形。深さは検出面から25～45cmを測る。Ⅲ-Ｂ期の塀SA4286およびⅢ-Ｃ期の建物SB4331と遺構の重複関係があり、それらより古い。建物の方位は北で東へ3.8°振れる。

掘立柱建物SB4243　第46次調査区で検出した、桁行２間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.0m×梁行4.4m、柱間寸法は桁行が2.5m、梁行が2.2mである。柱穴は大きさ40～70cmの隅丸方形。深さは検出面から20～35cmを測る。SK4265と遺構の重複関係があり、それより新しい。Ⅲ-Ａ期の南北塀SA4284とⅣ期の建物SB4350とは、柱穴が直接重複しないが遺構の範囲が重複しており、同時並存はしない。建物の方位は北で東へ2.3°振れる。

土坑SK4265　第46次調査区で検出した大土坑。南北3.0m、東西2.3mの不整形な楕円形を呈する。底面は凹凸があり、深さは検出面から北側の浅い部分が45cm、中央で95cmを測る。埋土は水平に近い堆積をし、下層は約40cmの暗青灰色の粘質土で、粗砂の交じる薄い堆積層を挟み、中層が約25cmの茶灰色の粘質土、上層が約30cmの淡茶灰色の粘質土となる。上層の埋土より、飛鳥Ⅲに属する土器がまとまって出土した。中層と下層には遺物を含まない。同じⅡ期の建物SB4243と遺構の重複関係があり、それより古い。

掘立柱建物SB4244　第46次調査区で検出した、桁行２間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行4.5m×梁行3.4m、柱間寸法は桁行が2.25m、梁行が1.7mである。柱穴は大きさ40～60cmの隅丸方形または不整形な楕円形。深さは検出面から35～50cmを測る。建物の方位は北で東へ3.7°振れる。

掘立柱建物SB4245　第46次調査区で検出した、桁行２間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行4.0m×梁行3.4m。柱間寸法は桁行が2.0m、梁行が1.7mである。柱穴は大きさ30～55cmの隅丸方形または不整形な楕円形。深さは検出面から25～40cmを測る。Ⅳ期の南北溝SD4358と遺構の重複関係があり、それより古い。建物の方位は北で東へ6.4°振れる。

掘立柱建物SB4246　第46次調査区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.0m×梁行2.8m、柱間寸法は桁行が1.67m、梁行が1.4mである。柱穴は大きさ60～80cmの隅丸方形。深さは検出面から25～40cmを測る。北東隅と北妻の２基の柱穴は検出していない。SB4247と遺構の重複関係があり、それより古い。建物の方位は北で東へ3.8°振れる。

掘立柱建物SB4247　第46次調査区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.5m×梁行3.0m、柱間寸法は桁行が1.83m、梁行が1.5mである。柱穴は大きさ65～90cmの隅丸方形。深さは検出面から40～70cmを測る。南妻柱と西側柱に粘質土の柱痕跡が遺存する。同じⅡ期の建物SB4246と遺構の重複関係があり、それより新しい。建物の方位は北で東へ4.3°振れる。

掘立柱建物SB4248　第46次調査区で検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行7.0m×梁行4.2m、柱間寸法は桁行が2.33m、梁行が2.1mである。柱穴は大きさ50～80cmの不整形の円形または方形。深さは検出面から30～40cmを測る。Ⅲ-C期の建物SB4333と遺構の重複関係があり、それより古い。建物の方位は北で東へ6.3°振れる。

掘立柱建物SB4985　第46次調査区から第50次調査西区にかけて検出した、桁行３間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行5.8m×梁行3.4m、柱間寸法は桁行が1.93m、梁行が1.7mである。柱穴は40～70cmの隅丸方形または不整楕円形で、深さは検出面から15cm程度しか残っていない。南東隅柱は削平されたためか、検出していない。遺構に重複関係があり、Ⅲ-C期の建物SB4333より古い。

南北塀SA5980　第53次調査南区で検出した掘立柱南北塀。２間分、4.6mを確認した。柱間寸法は2.3m。柱穴は大きさ50～65cmの隅丸方形で、深さは検出面から20cmを測る。

斜行南北溝SD4100　第45次調査Ⅲ区南半を北流する、南北方向の素掘溝。北端は第45次調査中央区南辺付近で消滅する。長さは約20m。幅は40～70cm、深さは10～20cmを測る。溝底の標高は北端で75.8m。やや蛇行するが、方位は北で東に10°振れる。

土坑SK4160　第45次調査中央区北端で検出した土坑。東西1.6m、南北1.2m以上で、北半は調査区外に延びる。深さ20cmの浅い窪みで、７世紀中葉の丸・平瓦を一括投棄していた。

土坑SK4161　第45次調査中央区で検出した浅い土坑。平面は東西1.3mのほぼ円形で、深さは検出面から25cm。埋土は茶灰色の粘質土で、SK4160と同様の瓦をごく少量含む。Ⅵ期の南北溝SD4141と重複関係があり、それより古い。

土器埋納坑SJ4260（Fig. 59）　第46次調査区東壁中央部で検出した、土器を埋設した土坑。径0.7m、深さ40cm程度の円形の土坑を掘り、土師器杯Ｃを正位で納め、肩部以上と底部を欠く須恵器甕を逆位に伏せ、その上を拳大の石で覆う。杯内部および甕内の埋土には、特に埋納物

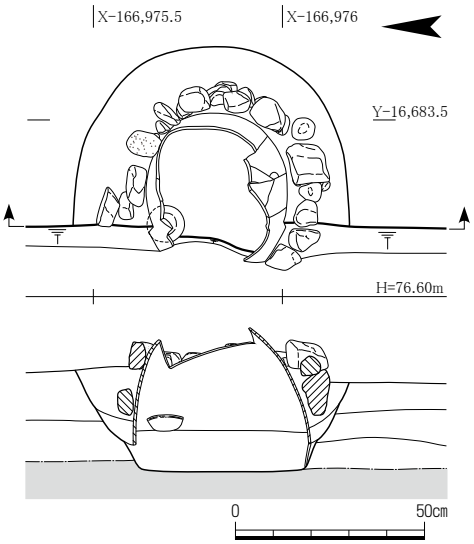


Fig. 59　SJ4260平面図・断面図　1:20

は認められなかった。土師器杯Ｃは、飛鳥Ⅰ新段階の年代が与えられる。

土坑SK4266　第46次調査区で検出した土坑。平面は不整形な円形で、幅0.8m、深さは検出面から25cmを測る。埋土は砂交じりの暗灰褐色粘質土で、炭粒と少量の土器を含む。土器は土師器杯、高杯、甕などが出土し、これらは飛鳥Ⅲの様相を示す。Ⅲ-Ｃ期の建物SB4330東側柱列と遺構の重複関係があり、それより古い。

土坑SK4267・4272　第46次調査区で検出した土坑。2基の土坑が重複しており、西側のSK4267が古い。SK4267の平面形は隅丸長方形で、東西1.6m、南北1.4m。断面形状は箱形で、深さは検出面から1.3m。下層は粘質土、上層は砂質土を主体とした埋土が10～20cm単位で堆積する。東側のSK4272の平面形は円形で、径1.4m。断面形状はすり鉢状を呈し、深さは検出面から0.8m。7世紀中葉の丸瓦や須恵器が出土した。Ⅲ-Ａ期の東三坊坊間路SF4300の中央にあり、それより古い遺構である。

土坑SK4270　第46次調査区で検出した土坑。平面は東西2.7m、南北1.8mの楕円形で、深さは検出面から50cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土で、吉備池廃寺創建の所用瓦と同笵の軒丸瓦や、丸瓦、平瓦、隅切平瓦が出土した。Ⅲ-Ｃ期の建物SB4331と遺構の重複関係があり、それより古い。

ii　古墳時代（Ⅰ期）の遺構（Pl. 3～8・10・11，Ph. 39・43～45）

古墳時代には自然河川が調査区中央を蛇行しながら北流し、その両岸に竪穴建物がまとまって建てられていた。

自然河川NR4225（Fig. 60）　第46次調査区から第45次調査中央区に北流する自然河川。第46次調査区、第53次調査中区、第50次調査東区では平面検出しており、第46次調査区の南から東へ蛇行するように流れ、第53次調査中区から第50次調査東区では東から北へ蛇行する様子が確認された。第45次調査Ⅲ区東壁断面で西肩の可能性がある落ち込みを確認しており、第45次調査中央区を若干東に振れながら南北に縦断して北へ抜けていたとみられる。規模は幅が最大約30m、深さは検出面から約90cmが残る。遺構は黄褐色粘土の地山を削り込んでおり、下層は黒褐色粘質土および砂質土が堆積し、上層に灰色砂が堆積する。上層は粗砂、細砂、粘質土の層が斜めに堆積しており、流水時の堆積とみられる。両岸の黒褐色粘質土の部分には竪穴建物

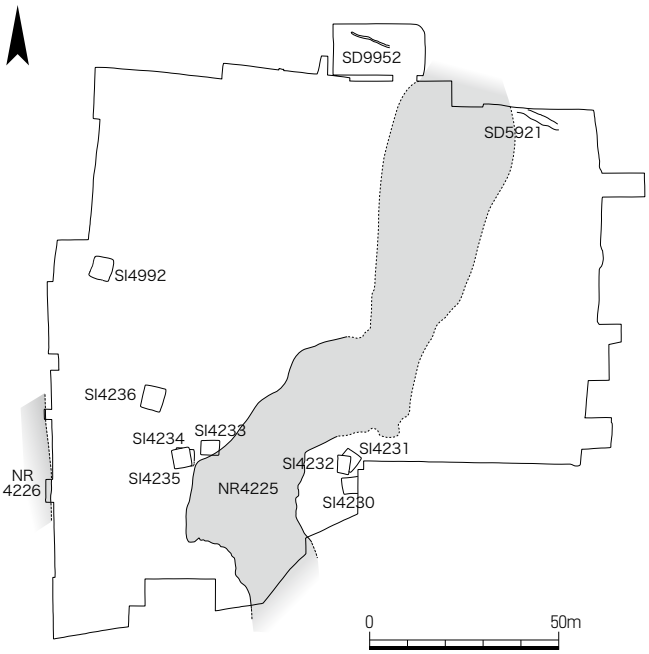


Fig. 60　NR4225・4226推定流域と周辺の竪穴建物　1:2000

が設けられており、また上層からは竪穴建物と同時期の土器が出土しているため、上層である灰色砂の範囲が竪穴建物と並存する範囲とみてよい。

自然河川NR4226（Fig. 60）　第46次調査区の西端をかすめて北流する自然河川。第46次調査区西辺の拡張区と第45次調査Ⅳ区西端で東岸を検出した。北側の第46次調査拡張区では長さ2.5m、南側のⅣ区では6mを検出しており、合わせて長さ24.5m分を確認した。南側では幅1.8m深さ1.5mを確認するが、河川の中心までは及んでいないとみられる。埋土は上層と下層に分かれる。上層は肩から約1mの深さまで流水による灰色砂と茶灰色粘質土が互層に堆積し、下層は肩に沿って地山ブロックを含む黄灰色の粘質土が堆積する。上層からは6世紀の土師器甕と須恵器杯が出土している。

竪穴建物SI4230　第46次調査区で検出した竪穴建物。東端は調査区外に延びるが、一辺4.3mの方形平面になると推定される。北辺は東で北に約6°振れる。削平が激しく、壁の立ち上がりは15cmほどしか残存しない。床面では4基の柱穴と小土坑を検出した。柱穴は東西1.9m、南北2.0mの方形に並ぶ。柱穴は径25cmの円形で、柱痕跡がある。小土坑は北西柱穴よりに位置し、径60cm程度の円形で、埋土から布留式土器の高杯が出土している。竪穴外周の周堤、周溝、竈、および床面の壁溝、貼床は確認していない。竪穴内部には炭化材がみられ、北東隅の柱痕跡は北側が焼けている。焼失住居であろう。NR4225の東岸に位置し、検出面の標高がやや高くなっている。土師器高杯や韓式系土器が出土した。

竪穴建物SI4231（Fig. 61）　第46次調査区で検出した、竈をもつ竪穴建物。東西4.5m、南北4.9mの長方形平面を呈する。長辺は北で東に38°振れる。竪穴の壁の立ち上がりは40cmほどが残存する。床面で、壁溝、貼床、柱穴3基、貯蔵穴1基を確認した。壁溝は竪穴の壁際から5～20cmの位置に北辺を除いた3辺で検出した。幅は15～30cm、床面からの深さは10～15cm程度。貼床は竪穴の南側で一部確認した。暗褐色の粘質土を厚さ3cmほど敷く。周溝と柱穴は貼床の上面から掘り込む。柱穴は西南隅では確認できていないが、東西2.4m、南北2.5mの間隔で四隅に配されていたとみられる。柱穴は大きさ20～30cmの円形または隅丸方形で、床面からの深さは30cm。柱痕跡は竪穴埋土が15cm堆積した面から確認された。貯蔵穴は竪穴の東辺北寄りに接して位置し、東西35cm、南北50cmの楕円形で、深さは10cm。埋土からは高杯脚部が出土した。竈は北辺の中央やや東寄りに設けられ、主軸は竪穴の長辺とほぼ平行（Fig. 61　C-C'）。焚口から竪穴壁までが約70cm、両袖最大幅が85cm。竪穴壁から30cm離れた主軸上に石を置いて支脚とする。煙道は確認されていないが、支脚の石から竪穴壁の間は底面が焼けておらず、上部に煙道があった可能性がある。竈前面には甕や甑が潰れた状態で散布していた。竪穴内埋土からは高杯や小型底丸壺、製塩土器が出土している。竪穴建物SI4232と重複関係があり、それより古い。床面の標高はSI4231の方が低い。自然河川NR4225の東岸、竪穴建物SI4230の北側に位置する。

竪穴建物SI4232（Fig. 61）　第46次調査区で検出した、竈をもつ竪穴建物。東西3.4m、南北4.8mの長方形平面を呈する。長辺は北で東に約8°振れる。竪穴の壁の立ち上がりは20cmほどが残存する。竪穴底部には炭化材が放射状に落下堆積しており、焼失住居とみられる。竪穴の南・西辺付近には特に壁に沿って炭化材が集積しており、最大で径10cm程度のものも検出した。それら炭化材を含む堆積層を除去した床面から、壁溝、柱穴4基、貯蔵穴1基を確認した。壁溝

は竪穴の壁際すぐの位置に四周に掘られ、幅は5～10cm、床面からの深さは5cm程度。貯蔵穴は竪穴の東辺北寄りに接して位置し、東西50cm、南北60cmの隅丸長方形で、深さは25cm。土師器壺と甕が出土した。竈は北辺の中央やや東寄りに設けられ、主軸は竪穴の長辺とほぼ平行。焚口から煙道までが約90cm、袖は西側のみ確認しており、主軸からの最大幅が45cmである。燃焼部を楕円形に浅く掘りくぼめ、石を置いて支脚とする。煙道は北に延び、長さ30cmを確認した。竈内部からは甕が潰れた状態で出土した。埋土からは土師器高杯、小型丸底壺、須恵器甕、製塩土器、韓式系土器甕が出土している。竪穴建物SI4231と重複関係があり、それより新しい。

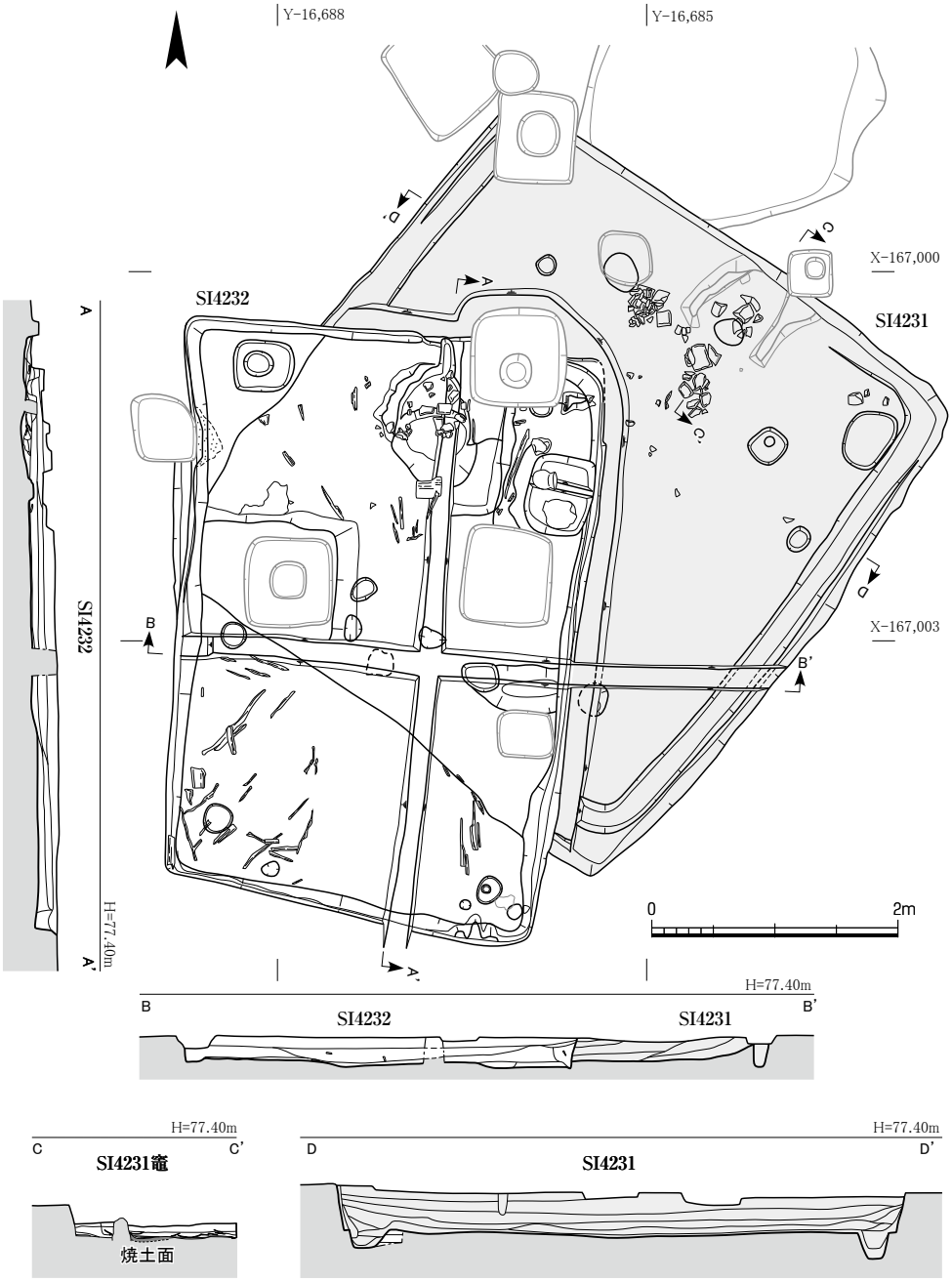


Fig. 61　SI4231・4232平面図・断面図　1:60

竪穴建物SI4233（Fig.62）　第46次調査区で検出した、竈をもつ竪穴建物。東西4.9m、南北3.9mの長方形平面を呈する。方位の振れはほぼ0である。竪穴の壁の立ち上がりは25cmほどが残存する。床面で、壁溝、柱穴3基、貯蔵穴1基を確認した。壁溝は竪穴の四周の壁際で検出したが、北辺東寄りで途切れる個所がある。幅は10～20cm、床面からの深さは10cm以上。柱穴は西北・西南隅と北辺南寄りで検出した。柱穴は大きさ35～50cmの円形または隅丸方形で、床面からの深さは25cm。貯蔵穴は竪穴の南辺北寄りに接して位置し、東西90cm、南北60cmの楕円形で、深さは25cm。高杯と甕の破片が出土した。竈は竪穴の東南隅に設けられ、主軸は竪穴の対角線方向（Fig.62　B-B', C-C）。竈は内側にずらして造りかえられている。第1次の竈は、第2次竈の支脚位置が焚口にあたるとみられる。焚口から竪穴壁までが130cm、両袖最大幅が60cm。焚口前面に浅い土坑を掘り、炭を掻き出していたようだ。焚口から30cmのあたりに支脚の残骸とみられる焼土面が残る。第2次の竈は焚口を50cm内側にして改修したとみられる。焚口から竪穴壁までが180cm、両袖最大幅は第1次と同じ60cm。焚口前面に浅い土坑を掘り、炭を掻き出す構造も同様とみられる。焚口から50cm離れた位置に、土師器高杯脚部を芯にして暗黄灰色の粘土を巻き、支脚とする。竈の燃焼部から焚口にかけて甕や甑が潰れた状態で散布していた。竈の燃焼部を中心として、第1次・第2次の竈に伴うとみられる炭層が竪穴底部に広がる。竪穴内埋土からは土師器や須恵器、製塩土器、韓式系土器が出土している。自然河川NR4225の西岸に位置する。

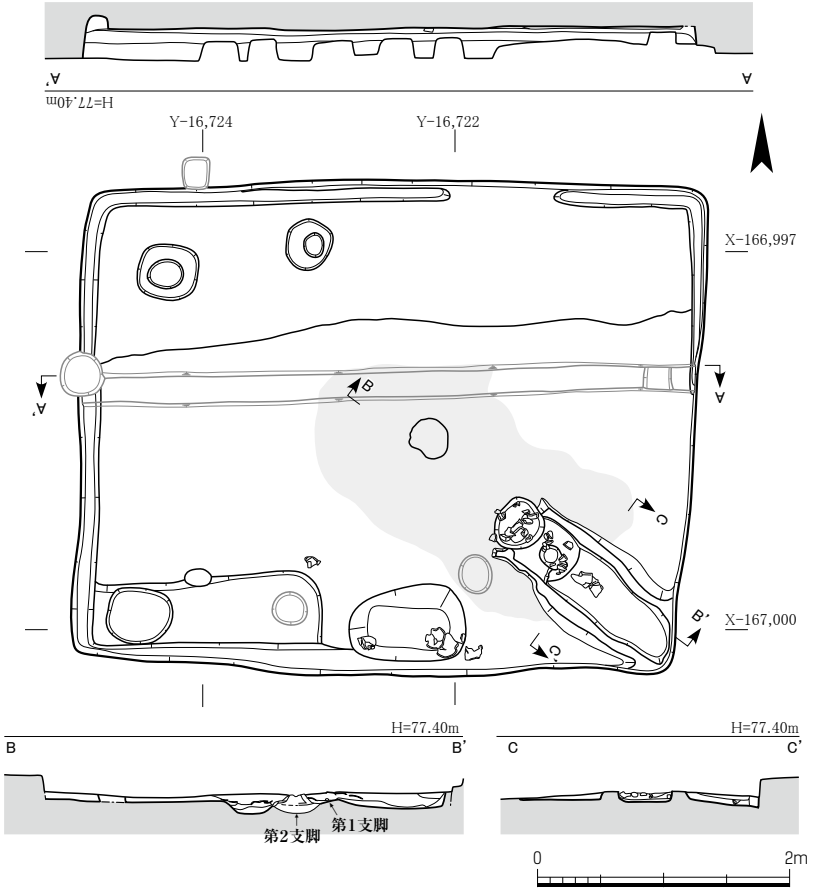


Fig. 62　SI4233平面図・断面図　1:60

竪穴建物SI4234（Fig. 63）　第46次調査区で検出した竪穴建物。大半を竪穴建物SI4235に壊される。東西5.0m、南北4.7mの長方形平面を呈する。長辺は東で南に6.5°振れる。竪穴の壁の立ち上がりは25cmほどが残存する。床面で、貼床、柱穴2基、貯蔵穴1基を確認した。貼床は暗褐色粘質土塊交じりの黄褐粘質土を厚さ5cmほどで敷く。柱穴は貼床の上面から掘り込む。柱穴は北東・北西隅で確認し、2.6mの間隔で方形に配されていたとみられる。柱穴は大きさ40cmの隅丸方形で、床面からの深さは10cmまで確認した。貯蔵穴は竪穴の南辺東寄りに接して位置し、東西70cm、南北60cmの楕円形で、深さ20cmのすり鉢状。土師器小型丸底壺が出土した。竪穴内埋土からは銅釧の破片、韓式系土器の蓋などが出土した。SI4235と重複関係があり、それより古い。床面の標高はSI4234の方が低い。自然河川NR4225の西岸、竪穴建物SI4233の西側に位置する。

竪穴建物SI4235（Fig. 63）　第46次調査区で検出した、竈をもつ竪穴建物。東西4.7m、南北5.2mの長方形平面を呈する。長辺は北で西に11.5°振れる。竪穴の壁の立ち上がりが5～10cmほどしか残存しない。床面から壁溝、柱穴4基、貯蔵穴1基、そのほかに小穴4基を確認した。壁溝は竪穴の壁際すぐの位置に四周に掘られ、幅は10～20cm、床面からの深さは10cm程度。柱穴は東西2.3m、南北2.4mで方形に配されていたとみられる。柱穴は大きさ30cmの隅丸方形。貯蔵穴は竪穴の東辺北寄りに接して位置し、東西75cm、南北100cmの楕円形形で、深さは20cm。南辺の中央に焼土と甕破片などが集中する範囲があり、竈の痕跡とみられる。竪穴内埋土からは土師器高杯、甕、韓式系土器が出土している。竪穴建物SI4234と重複関係があり、それより新しい。

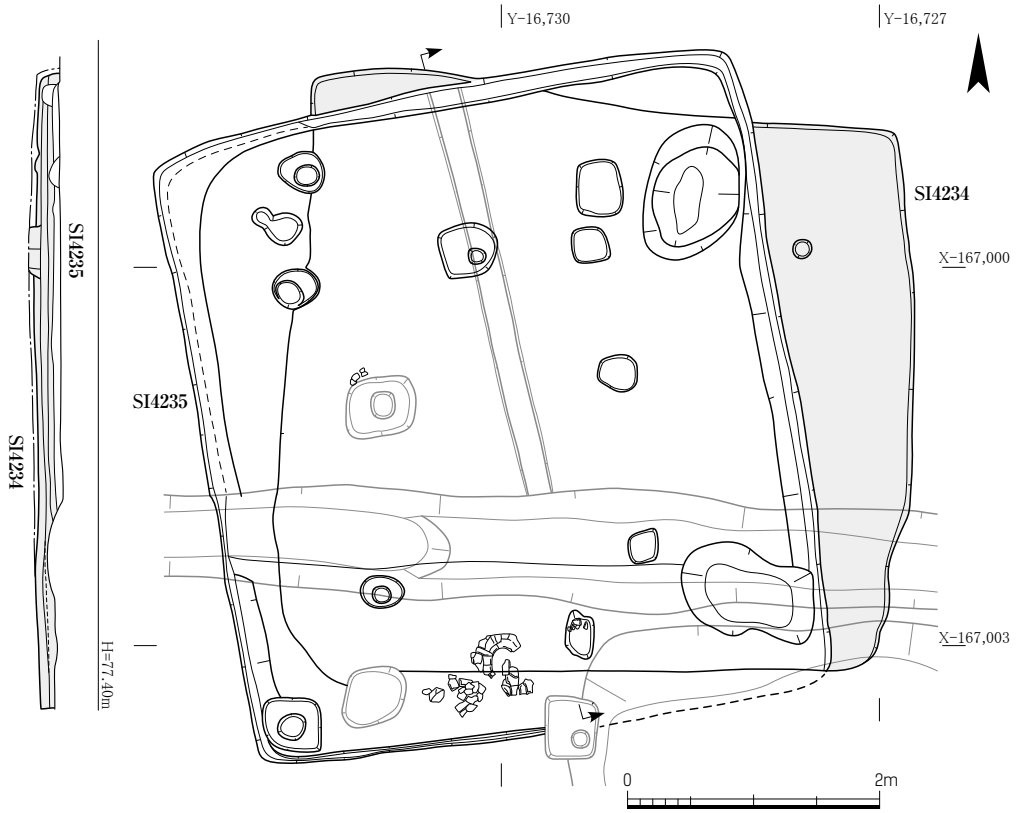


Fig. 63　SI4234・4235平面図・断面図　1:60

竪穴建物SI4236（Fig. 64）　第46次調査区で検出した竪穴建物。竪穴建物の中では最大規模のものである。東西5.7m、南北6.1mの長方形平面を呈する。長辺は北で東に約17.5° 振れる。竪穴の壁の立ち上がりは5～15cmほどしか残存しない。床面から、壁溝、柱穴4基、貯蔵穴1基、そのほかに小穴4基を確認した。壁溝は北辺以外の三辺で竪穴の壁際すぐの位置に確認した。幅は10～20cm、床面からの深さは5～10cm程度とごく浅い。柱穴は東西3.4m、南北4.0mの方形四隅に配される。柱穴は大きさ40～50cmの隅丸方形で、床面からの深さは30～40cmで、柱痕跡が径15～20cmの粘質土となって遺存する（Fig. 64　B-B'）。貯蔵穴は竪穴の南辺東寄りに接して位置する。東西75cm、南北65cmの隅丸長方形で、深さは40cm（Fig. 64　A-A'）。底面の四隅に打ち込まれた杭が粘質土となり遺存していた。土師器高杯、甕のほか韓式土器の蓋が出土した。北辺の中央に焼土があり、竈の痕跡とみられる。竪穴内埋土からは土師器高杯、甕、製塩土器、韓式系土器が出土した。Ⅲ-B期の建物SB4332と重複関係があり、それより古い。自然河川NR4225の西岸、竪穴建物SI4233の北西に位置する。

竪穴建物SI4992　第50次調査西区で検出した竪穴建物。東西5.5m、南北6.0mの長方形平面を呈する。長辺は北で東に22° 振れる。六条条間路南側溝SD4311と東三坊坊間路東側溝SD4301の交点に重複し、それより古い。藤原京期の遺構を保存するために掘り下げての調査を行って

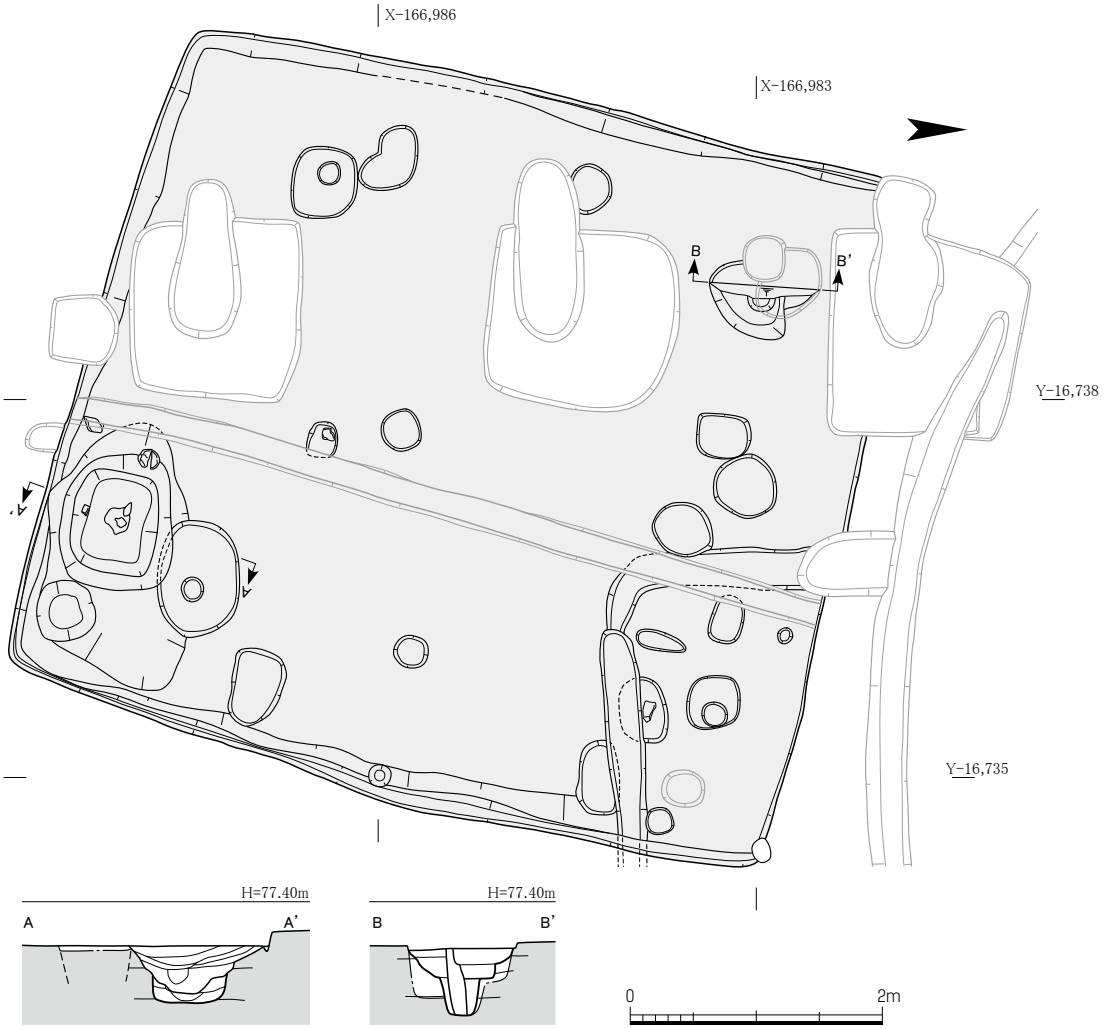


Fig. 64　SI4236平面図・断面図　1:60

おらず、詳細な構造は不明。

自然木集積SX5922　第53次調査北区北西隅の断ち割り調査で確認した、流路堆積土中の自然木の集積。流路は東で南に振れる東西方向で、東流するとみられる。木材は流路の灰色砂質土中に、流れに沿って方向を揃え、幅２ｍほどの範囲に集積する。長さ５ｍで調査区を西に拡張し、20点弱の自然木を確認した。自然木は大きいもので長さ2.3ｍ、径25㎝ほどで、木口に伐採痕跡が認められるものもある。遺構の重複関係より、斜行東西溝SD5921より古い。古墳時代以前の流路とみられるが、年代が判明する遺物は出土していない。また、自然河川NR4225と一連である可能性も否定できないが、それを肯定する根拠を明らかにすることもできなかった。この周辺は土層の堆積からみて、数時期の流路が重複しているとみられる。

斜行東西溝SD5921　第53次調査北区で検出した東西方向の素掘溝。長さ13ｍを確認した。幅2.3ｍ、検出面からの深さは10～20㎝程度と非常に浅い。方位は東で南に26.0°振れる。自然木集積SX5922の上に明灰褐色砂質土の整地を行い、その上から掘削されている。

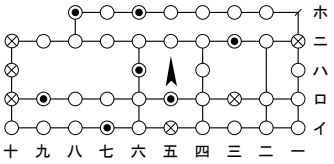
斜行東西溝SD9952　第133-７次調査区で検出した東西方向の素掘溝。長さ11ｍを確認した。幅は40㎝、検出面からの深さは30㎝程度。方位は東で南に20.6°振れる。遺構の重複関係があり、土器据付穴SJ9953より古い。

土器据付穴SJ9953　第133-７次調査区で検出した土器壺底部を据え付けた土坑。直径55㎝のほぼ円形で、検出面からの深さは20㎝。斜行東西溝SD9952の埋土の上から据付穴を掘削し、灰褐色粘質土を穴底に入れ、土器の底部を据え付ける。

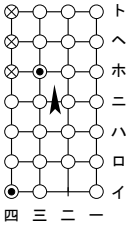
D　平安時代～中世の遺構

i　平安時代前・中期（Ⅴ期）の遺構（Pl. 2・3・6・7・10・11，Ph. 18・19）

平安時代は遺構が希薄になり、第46次調査区中央部に数棟がまとまって展開する状況を示す。SD4130は埋没が進みながらも存続し、その北には井戸が並ぶ。井戸SE4765・4782・4793・4980・5095については475頁の別表１に概要を記す。



掘立柱建物SB4370　第46次調査区で検出した掘立柱東西棟建物。身舎は桁行９間×梁行２間で、南側は全面、北側は東寄り７間に廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行19.1ｍ×梁行3.7ｍ、廂の出は南北とも2.0ｍである。柱間寸法は桁行で2.12ｍ、梁行は1.8ｍである。妻柱筋のハ四・ハ六に柱穴を検出しており、間仕切りであった可能性が考えられる。柱穴は一辺2.5～4.0ｍの隅丸方形。深さは検出面から20㎝を測る。７基の柱穴で柱痕跡を確認した。また、礫が入っている柱穴が６基あり、根固めの石であった可能性がある。建物の方位は東で南へ0.9°振れる。第46次調査区中央にまとまるⅤ期の遺構群の中で最も大きい建物であり、主屋であったと推定される。



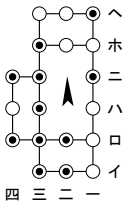
掘立柱建物SB4371　第46次調査区で検出した、総柱の掘立柱南北棟建物。桁行６間×梁行３間、建物の規模は桁行12.0ｍ×梁行5.6ｍ。柱間寸法は桁行がほぼ等間で2.0ｍ、梁行はややばらつきがあり、1.7～2.0ｍである。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは25～40㎝である。深さは検出面から10～30㎝を測

る。イ四・ホ三の柱穴には柱痕跡が灰褐色粘質土として認められる。西側柱筋の柱穴、ホ四～ト四は柱穴に礫が入っており、根固めの石であった可能性がある。南から３間目、西端の１間四方のほぼ中央に、重複する２基の土坑SK4392・4393がある。建物の方位は北で東へ1.7°振れる。

土坑SK4392・4393　SB4371の内部で検出した重複する２基の土坑。SK4392は東西70㎝、南北60㎝の円形で、深さ20㎝のすり鉢状を呈する。埋土には木炭片や焼土塊を多量に含み、10世紀後半の土師器小皿や須恵器甕などが出土した。SK4393はSK4392の東南に重複し、東西80㎝、南北60㎝の楕円形を呈する。遺構の重複関係より、SK4392のほうが古い。

大土坑SK4390　第46次調査区で検出した池状の大土坑。東西4.0ｍ、南北9.4ｍで深さは検出面から0.3ｍを測る。西岸に沿って玉石が点々と遺存していた。埋土からは10世紀末～11世紀初めの黒色土器、土師器の杯、皿、甕、須恵器などが一括で出土した。

掘立柱建物SB4372　第46次調査区で検出した、桁行２間×梁行２間の掘立柱建物。建物の規模は桁行4.2ｍ×梁行4.0ｍでほぼ正方形を呈し、柱間寸法は桁行2.1ｍ、梁行2.0ｍである。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは30～35㎝、深さは検出面から20㎝。４基の柱穴で柱痕跡を確認している。小溝群と重複関係があり、それより古い。建物の方位は北で東へ7.0°振れる。



掘立柱建物SB4373　第46次調査区で検出した、桁行５間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物の規模は桁行10.5ｍ×梁行3.5ｍ、柱間寸法は桁行が2.1ｍ、梁行が1.75ｍである。南北両妻柱から１間内側、ロ二・ホ二で柱穴を検出しており、間仕切りであった可能性が考えられる。西側に２間分、ロ四～二四が廂として取りつく。柱穴は20～50㎝の円形または隅丸方形で、深さは検出面から35㎝を測る。小溝群と重複関係があり、それより新しいことから、SB4372より新しいといえる。建物の方位は北で東へ1.3°振れる。

南北塀SA4380・東西塀SA4383・南北塀SA4381　第46次調査区で検出した、「凵」形をなす掘立柱塀。西辺にあたる南北塀SA4380は３間分6.2ｍを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で2.07ｍ。柱筋は北で5.5°東に振れる。南辺にあたる南北塀SA4383は３間で、全長は6.5ｍ。柱間寸法はおおよそ等間で2.17ｍ。柱筋は東で南に1.3°振れる。東辺にあたるSA4381は３間分6.1ｍを確認した。柱間寸法はおおよそ等間で2.03ｍ。柱筋は北で東に5.5°振れる。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは30～40㎝。SA4381の北端を除く全ての柱穴で、柱痕跡を確認している。３条の塀により区画施設などをなすと考えられるが、内部に建物などの同時期遺構を確認できておらず、性格は不明である。

南北塀SA4382　第46次調査区で検出した南北方向の掘立柱塀。２間分、4.2ｍを確認した。柱間寸法は2.1ｍ。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは35～40㎝。柱筋は北で東に8.2°振れる。

土坑SK4391　第46次調査区で検出した土坑。東西1.0ｍ、南北0.85ｍの長方形を呈する。10世紀後半の土師器小皿と甕が出土した。Ⅲ-Ｃ期の建物SB4330と重複関係があり、それより新しい。

掘立柱建物SB4788　第47次調査区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行4.2ｍ×梁行4.0ｍ。柱間寸法は桁行で2.1ｍ、梁行で2.0ｍである。柱穴は25～30㎝の円形。東妻柱は検出していない。建物の方位は東で南へ6.6°振れる。

焼土坑SK4779　第47次調査区で検出した土坑。南北0.8m、東西0.7mの不整形な楕円形を呈する。深さは15㎝。土坑の底面と壁は被熱で赤色化する。底面の東壁際には部分的に青灰色粘質土が薄く堆積する。下層には炭交じり黒色粘質度が堆積する。炉の下部構造であった可能性が考えられる。

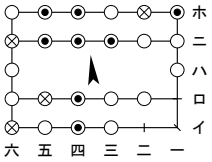
土坑SK4795　第47次調査区で検出した円形土坑。南北1.2m、東西1.0m、検出面からの深さは10㎝と非常に浅い。中央には20㎝程の石が数個あり、埋土からは羽釜が出土した。

ii　平安時代後期以降（Ⅵ期）の遺構

本調査区では多数の中世の遺構を検出したが、その多くは第46次調査区の3箇所にまとまりをもって分布しており、その周辺が集落の中心部であると判断できる。そのため、ここではそれを東北部のA区、その西に約5mの空閑地をはさんで展開するB区、および西南部のC区に便宜的に分け、まずA～C区の遺構について記述する。次いで、第50次調査西区から第47次調査区にかけて検出した、集落を区画すると考えられる大溝とその周辺の遺構について記述し、最後にそれ以外の地区の遺構について記す。

a　A区の遺構（Pl. 7・8，Ph. 16・20・47）

A区では掘立柱建物SB4420・4421を中心として、掘立柱建物、塀、土坑、井戸を検出した。井戸SE4466・4468・4469・4470・4471については475頁の別表1に概要を記す。



掘立柱建物SB4420　桁行5間×梁行2間の身舎の南北に廂が付く掘立柱東西棟建物。建物規模は身舎部分が桁行10.5m×梁行3.7m、廂の出は南廂が2.0m、北廂が1.7mである。柱間寸法は桁行で2.1m、梁行は1.85mである。柱穴は一辺30～70㎝の隅丸方形または不整方形。8基の柱穴で柱痕跡を確認した。また、4基の柱掘方からは礫を検出した。建物の方位は東で南へ5.9°振れる。A区にあるⅥ期の遺構群の中で、最も大きい建物である。

牛馬小屋SX4500　SB4420の南西にある、浅い皿状の土坑と桁行2間×梁行1間の掘立柱南北棟建物が組み合わさった遺構。西側柱筋をSB4420の西妻柱に合わせ、建物規模は桁行4.5m×梁行3.5mである。内部に位置する土坑は東西2.4m、南北3.6mの隅丸長方形。周縁部の南半には石列を伴い、東辺北寄りの一部を除いて杭列を確認した。近世の事例から類推すると、牛馬小屋にあたるとみられる。

掘立柱建物SB4421　SB4420に重複して検出した掘立柱東西棟建物。桁行5間×梁行2間の身舎の南北に廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行10.8m×梁行4.2m、廂の出は南廂が2.1m、北廂が2.0mである。柱間寸法は桁行で2.16m、梁行は2.1m。柱穴は大きさ20～50㎝の円形または隅丸方形。9基の柱穴で柱痕跡を確認した。建物の方位は東で南へ3.5°振れる。SB4420とほぼ同規模であり、柱位置が約2m南にずれる。先後関係は不明だが、柱位置をずらして建て替えたものであろう。SB4421の方が柱穴はやや小型である。後述するSK4496がSB4421に伴う遺構であれば、SB4421はSB4420より古いことになる。

土坑SK4496　SB4421の南西隅で検出した浅い皿状の土坑。東西3.0m、南北4.2mの隅丸長方形を呈する。遺構に重複関係があり、牛馬小屋SX4500より古い。建物との位置関係から、

SX4500と同様に、SB4421に伴う遺構である可能性もあるが、SB4421より方位の振れが大きく、SK4496の内部からもSB4421の柱穴を検出しているということもあり、断定はし難い。

掘立柱建物SB4422　建物SB4420の東南に重複して検出した掘立柱東西棟建物。桁行４間×梁行２間、建物規模は桁行9.0ｍ×梁行3.7ｍ。柱間寸法は桁行で2.25ｍ、梁行は1.85ｍである。柱穴は大きさ30～100㎝の不整方形。４基の柱穴で柱痕跡を確認した。建物の方位は東で南へ6.2°振れる。

掘立柱建物SB4415　SB4420の南西で、後述する東西塀SA4432よりも南で検出した掘立柱東西棟建物。桁行５間×梁行１間、建物規模は桁行11.0ｍ×梁行1.9ｍ。柱間寸法は桁行で2.2ｍ、梁行は1.9ｍである。柱穴は30㎝前後の円形。建物の方位に振れはない。

掘立柱建物SB4416　SB4420の南東で検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間、建物規模は桁行6.5ｍ×梁行3.5ｍ。柱間寸法は桁行で2.16ｍである。東西両妻柱は検出していないが、梁行の寸法より２間であったとみられる。柱穴は30㎝前後の円形。建物の方位は東で南へ4.1°振れる。

掘立柱建物SB4417　SB4420の北東で検出した掘立柱東西棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行4.2ｍ×梁行3.9ｍ。柱間寸法は桁行で2.1ｍ、梁行は1.95ｍである。柱穴は30㎝前後の楕円形。建物の方位は東で南へ7.5°振れる。SB4421とは柱穴の重複はないが、遺構範囲が重複しており、並存はしない。

掘立柱建物SB4418　SB4420の北西で検出した掘立柱南北棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行4.0ｍ×梁行3.5ｍ。柱間寸法は桁行で2.0ｍ、梁行は1.75ｍである。柱穴は30～70㎝の隅丸方形。４基の柱穴で柱痕跡を確認した。建物の方位は北で東へ9.3°振れる。SB4420の北廂から0.9ｍの位置にあり、方位の振れや柱穴の形状から、その付属屋であった可能性がある。

掘立柱建物SB4419　SB4420の北西で検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間、建物規模は桁行6.6ｍ×梁行4.2ｍ。柱間寸法は桁行で2.2ｍ、梁行は2.1ｍである。柱穴は30㎝前後の不整形または円形。５基の柱穴で柱痕跡を確認し、２基の柱穴には礫が入る。建物の方位は東で南へ3.2°振れる。SB4418とは柱穴の重複はないが、遺構範囲が重複しており、並存しない。

南北塀SA4430・東西塀SA4431　SB4420の西で検出した、Ｌ字形をなす掘立柱塀。西辺にあたるSA4430は６間分、11.7ｍを確認した。柱間寸法は1.95ｍ。柱筋は北で3.5°東に振れる。南辺にあたるSA4431は２間で、4.1ｍ。柱間寸法は2.05ｍ。柱筋は東で南に3.5°振れる。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは25～45㎝。SB4420・4421を中心とした区画の西南を画する塀。

東西塀SA4432　SB4420の南で検出した掘立柱塀。３間分6.6ｍを確認した。柱間寸法は2.2ｍで、柱筋は東で南に1.5°振れる。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは20～40㎝。SB4420・SB4421を中心とした区画の南限の塀。

東西塀SA4433　SB4420の南で検出した掘立柱塀で、SA4432の北２ｍにある。４間分9.0ｍを確認した。柱間寸法は2.25ｍ。柱筋は東で南に3.0°振れる。柱穴は円形または隅丸方形で、大きさは25～50㎝。SB4420・4421を中心とした区画の南限の塀。

大土坑SK4501　SB4420と南北塀SA4430の間で検出した南北に長い池状の大土坑。東西3.5ｍ、

南北9.0mの不整形な楕円形。東西両岸は段状を呈し、深さは中央で55cmを測る。埋土は検出面から40cmが黄灰砂塊を含む灰茶色粘質土で埋め立て土とみられ、下層15cmが木屑を含む暗青灰色粘質土である。

井戸SE4467（Fig. 65）　南北塀SA4320の柱穴および井戸SE4466を壊して掘られた井戸。掘方は一辺2.7mの隅丸方形で、深さ2.5m。掘方の南側に井戸枠を据え、北側を底から0.9mで段掘りとしている。井戸枠は掘方底部で底を抜いた曲物、その上部で一辺0.7mの方形縦板組とする。縦板は厚さ2～3cmで、一部の板で裏表に赤色顔料が認められ、転用材とみられる。縦板を止

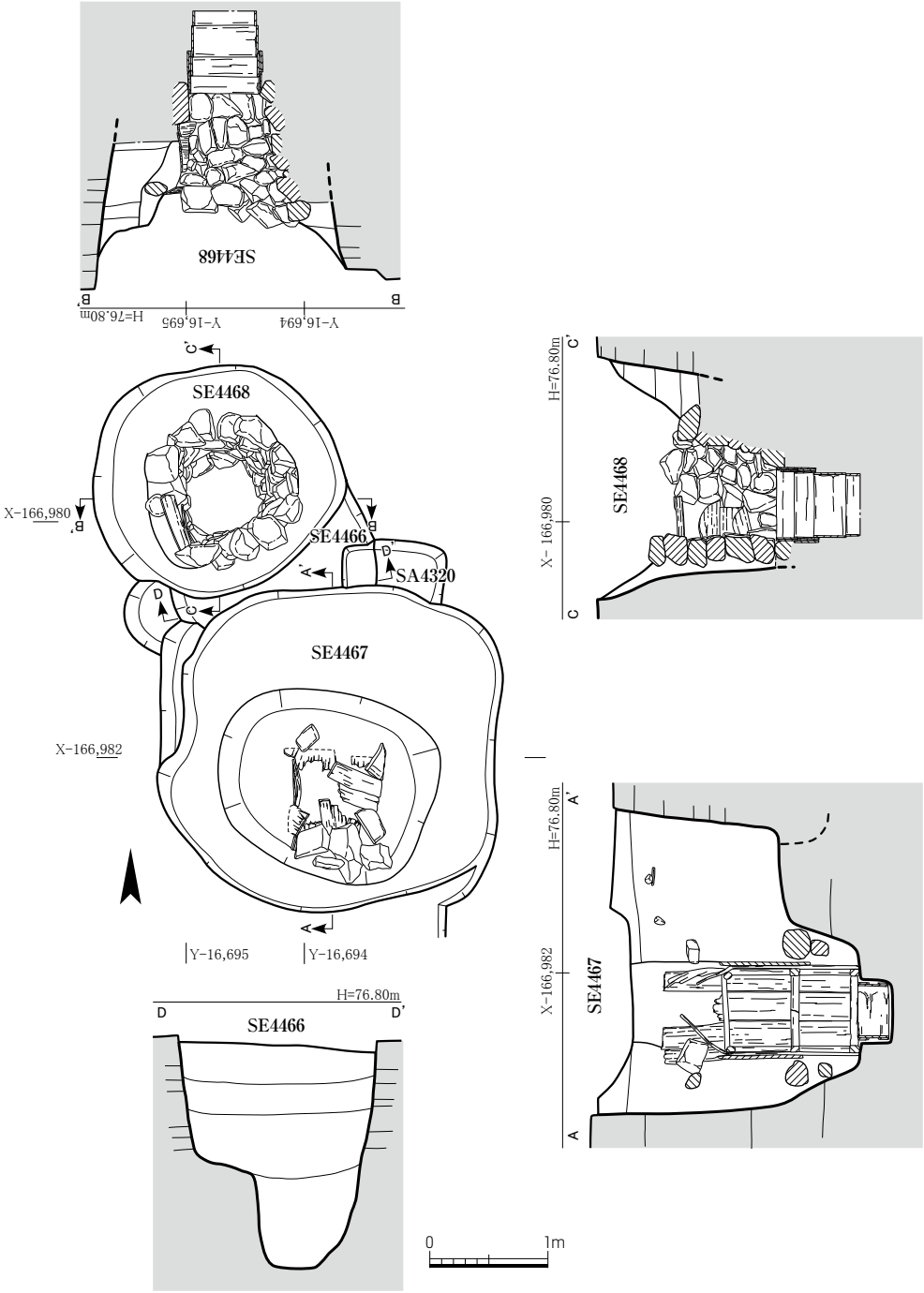
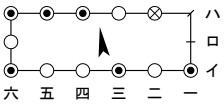


Fig. 65　SE4466・4467・4468平面図・断面図　1:60

める横桟は四隅に束をはさんで3段分が残り、縦板の目地には一部に裏板をあてる。井戸枠内から鉄鎌、上層から花形飾金具が出土している。11世紀末から13世紀の間で存続。

b　B区の遺構（Pl. 6・7，Ph. 13・20・48）

B区では掘立柱建物SB4440・4441・4442・4443を中心として、掘立柱建物、塀、素掘溝、土坑、井戸を検出した。井戸SE4472・4473については475頁の別表1に概要を記す。



掘立柱建物SB4440　桁行5間×梁行2間の掘立柱東西棟建物。規模は桁行12.0m×梁行3.9mである。柱間寸法は桁行で2.4m、梁行は1.95mである。柱穴は大きさ40～50cmの隅丸方形または円形。建物の方位は東で南へ8.3°振れる。SB4440・4441・4442・4443の4棟は、遺構の重複範囲からみて、柱位置や規模を少しずつ変えながらB区の主屋として建て替えられたものと考えられる。SB4440は柱穴の重複関係があり、SB4441より古い。

掘立柱建物SB4441　SB4440に重複し、やや南で検出した掘立柱東西棟建物。桁行5間×梁行2間、建物規模は桁行10.3m×梁行4.0mである。柱間寸法は桁行で2.06m、梁行は2.0mである。柱穴は大きさ40～80cmの隅丸方形または不整形方形。建物の方位は東で南へ7.0°振れる。柱穴の重複関係があり、SB4440より新しく、SB4442より古い。

掘立柱建物SB4442　SB4440に重複して検出した掘立柱東西棟建物。桁行4間×梁行2間の身舎の北に1間の廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行8.0m×梁行3.9m、廂の出は1.95mである。柱間寸法は桁行で2.0m、梁行は1.95mである。柱穴は大きさ20～40cmの円形または隅丸方形。建物の方位は東で南へ5.8°振れる。柱穴の重複関係があり、SB4441より新しい。

掘立柱建物SB4443　SB4440に一部重複し、やや南で検出した掘立柱東西棟建物。桁行4間×梁行2間の身舎の南に1間の廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行8.5m×梁行3.5m、廂の出は1.75mである。柱間寸法は桁行で2.13m、梁行は1.75mである。柱穴は大きさ25～40cmの円形または隅丸方形。建物の方位は東で南へ7.2°振れる。SB4440・4441・4442とは、柱穴の重複関係はない。

掘立柱建物SB4445　SB4440の西で検出した掘立柱南北棟建物。桁行2間×梁行2間、建物規模は桁行4.4m×梁行3.5m。柱間寸法は桁行で2.2m、梁行は1.75mである。柱穴は40～70cmの楕円形または隅丸方形。検出面からの深さは50～60cmを測る。南西隅の柱穴には径15cmの柱根が遺存する。建物の方位は北で東へ8°振れる。

掘立柱建物SB4446　SB4440の2.5m南で検出した掘立柱南北棟建物。桁行2間×梁行2間、建物規模は桁行4.2m×梁行4.0m。柱間寸法は桁行で2.1m、梁行は2.0mである。柱穴は25～30cmの円形または隅丸方形。棟通り中央にも柱穴があるが、東側柱筋中央の柱は検出していない。建物の方位は北で東へ3.4°振れる。

溝SD4520　SB4455の北側から西側にかけて検出した、鉤の手に曲がる素掘溝。西辺にあたる南北溝は長さ8m、幅は90～110cm、深さは検出面から40cmを測る。北端で東に折れる。方位は北で東に6.5°振れる。北辺にあたる東西溝は長さ8m、幅は70～170cm、深さは15～40cmで、東ほど幅広く、深さも深い。方位は東で南に2.5°振れる。SB4445の柱筋から溝心までの距離は約2mを測る。SB4440等を中心とした区画の、西と北を限る溝と考えられる。

掘立柱建物SB4447　SB4445・SD4520の北側で検出した、総柱の掘立柱東西棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行3.9m×梁行3.4m。柱間寸法は桁行で1.95m、梁行は1.7mである。柱穴は20～30㎝の円形。棟通り中央にも柱穴がある。建物の方位は東で南へ3.3°振れる。

南北塀SA4455　SD4520の南西で検出した南北方向の掘立柱塀。３間分5.3mを確認した。柱間寸法は1.77m。柱筋は北で東に8.5°振れる。柱穴は円形で、大きさは30～45㎝。SB4440等を中心とした区画の西限の塀。

井戸SE4474（Fig. 66）　SB4440の北側にある井戸。掘方は南北2.1m、東西1.8mの隅丸方形を呈し、深さは全体で2.1m。井戸枠は掘方の北西寄りに据える。枠板は抜き取られているが、一辺0.8mの方形縦板組であったとみられ、横桟が1段分残る。掘方の平面は検出面からの深さ1.25mのところでさらに径0.7mの円形に狭まり、底まで曲物3段を重ねる。埋土から横櫛、短刀が出土した。11世紀末から13世紀の間で存続した。Ｂ区に所在する３基の井戸は、出土遺物と遺構の重複関係から、SE4472、SE4474、SE4473の順に掘られたとみられる。

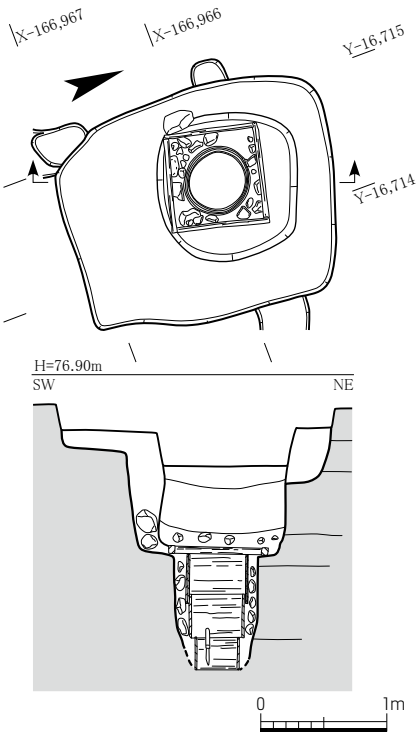


Fig. 66　SE4474平面図・断面図　1:60

土坑SK4510　SB4440の北東で検出した南北に長い溝状の土坑。幅1.1m、長さ4.3m、深さは検出面から35㎝を測る。瓦器と古代の塼仏が出土した。

c　Ｃ区の遺構（Pl. 10, Ph. 13・19）

Ｃ区では掘立柱建物と井戸を検出した。Ａ区・Ｂ区では中心建物が東西棟であるのに対し、Ｃ区では南北棟となる。井戸SE4461・4462・4463・4464・4465については475頁の別表１に概要を記す。

掘立柱建物SB4405A・B・C（Fig. 67）　桁行５間×梁行２間の掘立柱南北棟建物。建物規模は桁行10.5m×梁行3.8m、柱間寸法は桁行で2.1m、梁行は1.9mである。柱穴は一辺30～40㎝の隅丸方形または円形。南北とも妻柱は検出していないが、棟通りのロ二・ハ二には柱穴があり、間仕切りとみられる。また、全ての柱穴は東西方向に３基が重複しており、同じ規模と柱配置の建物を、西へ30㎝ずつずらしながら２回建て替えたものである。Ｃ区にまとまる平安時代後期から鎌倉時代の遺構群の中で、最も大きい建物である。SB4407・

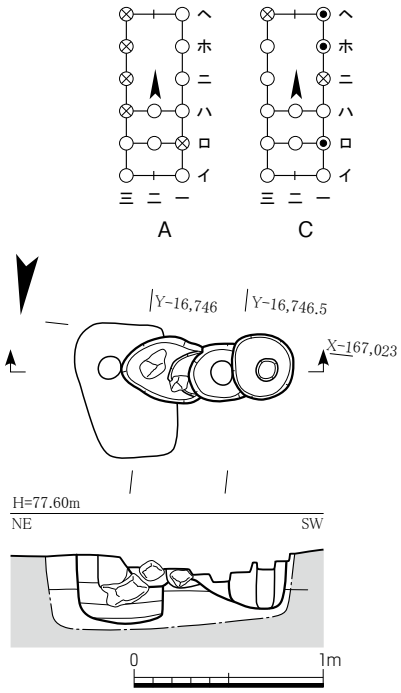


Fig. 67　SB4405柱穴（ロ一）
平面図・断面図　1:40

4409とは並存しない。建物の方位に振れはない。

掘立柱建物SB4406　SB4405の西で検出した掘立柱東西棟建物。桁行４間以上×梁行２間で、西妻は調査区外へ延びる。建物規模は桁行8.8m以上×梁行3.7m。柱間寸法は桁行で2.2m、梁行で1.85mである。柱穴は25～40cmの円形または隅丸方形。建物の方位は東で南へ7.2°振れる。SB4408・4410とは並存しない。

掘立柱建物SB4407　SB4405の北側で重複して検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間。建物規模は桁行7.8m×梁行4.0m。柱間寸法は桁行で1.8～3.3mとややばらつきがあり、梁行は北側が1.7m、南側が2.3mである。柱穴は30～50cmの円形または隅丸方形で、西妻のみ80cmの不整方形を呈する。建物の方位は東で南へ1.2°振れる。遺構の重複関係があり、SB4405より古く、SB4409とは並存しない。

掘立柱建物SB4408　SB4405の東で検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間、建物規模は桁行5.7m×梁行4.3m。柱間寸法は桁行で1.9m、梁行で2.15mである。柱穴は30～40cmの円形。北西隅の柱は検出しておらず、また北側柱筋は柱穴が１基多く、柱間がやや詰まる。建物の方位は東で南へ2.6°振れる。SB4406とは並存しない。

掘立柱建物SB4409　SB4405の西で検出した掘立柱東西棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行4.4m×梁行3.8m。柱間寸法は桁行で2.2m、梁行で1.9mである。柱穴は20～50cmの円形。北東隅柱と東妻柱の柱穴は検出していない。建物の方位は東で南へ1.7°振れる。SB4405・4407とは並存しない。

掘立柱建物SB4410　SB4405の西で検出した掘立柱東西棟建物。桁行２間以上×梁行２間で、西妻は調査区外へ延びる。建物規模は桁行3.6m以上×梁行4.2m。柱間寸法は桁行で1.8m、梁行で2.1mである。柱穴は50～70cmの円形または隅丸方形。西妻柱から１間東に35cmとやや小型の柱穴を検出しており、間仕切りがあったか、あるいは総柱建物の可能性もある。建物の方位は東で南へ6.2°振れる。SB4406とは並存しない。

掘立柱建物SB4411　SB4405の西で検出した掘立柱東西棟建物。桁行１間×梁行１間、建物規模は桁行2.2m×梁行2.0m。柱穴は30～35cmの円形または隅丸方形。建物の方位は東で南へ5.5°振れる。

d　大溝とその周辺の遺構（Pl. 2・3・6，Ph. 28・32・34）

調査区の北西に、集落を区画する大溝の南東部分がかかる。大溝の内側では掘立柱建物と多数の井戸を検出した。大溝の外側では遺構が希薄になるが、掘立柱建物や井戸を検出している。大溝内側の井戸SE4739・5010・5022・5023・5055と、大溝外側の井戸SE4790・5001については475頁の別表１に概要を記す。

大溝SD4755・4745・4744（Fig. 68）　第47次調査区から第50次調査西区にかけて検出したクランクのある南北方向の素掘溝。北側の南北溝SD4755は長さ26m分を検出している。幅は最大で3.2m、深さは90cm。北端は調査区外へ延び、南端はSD4745の東端に接続する。方位は北で東に12.5°振れる。クランク部分にあたる東西溝SD4745は長さ8.3m、幅1.6m、深さ70m。西端でSD4744の北端に接続する。方位は東で南へ2.0°振れる。南側の東西溝SD4744は長さ5.6m、幅2.2m、深さ50cm。方位は北で東へ12.0°振れる。溝の断面形状は逆三角形または逆台形

を呈し、底部には青灰色粘質土が厚さ10～15㎝堆積する。中層は灰色砂または灰色粘質土が堆積し、上層は炭や焼土の混じる灰褐色の砂質土で埋め立てている。遺構の重複関係より、東西大溝SD4130より新しい。埋土からは、塼仏、室町時代の銅鏡、大観通寶、中世の瓦、14世紀末から15世紀初頭の土器などが出土している。中世の集落を区画する大溝とみられ、後述するSD4791・4743と一連になる可能性がある。

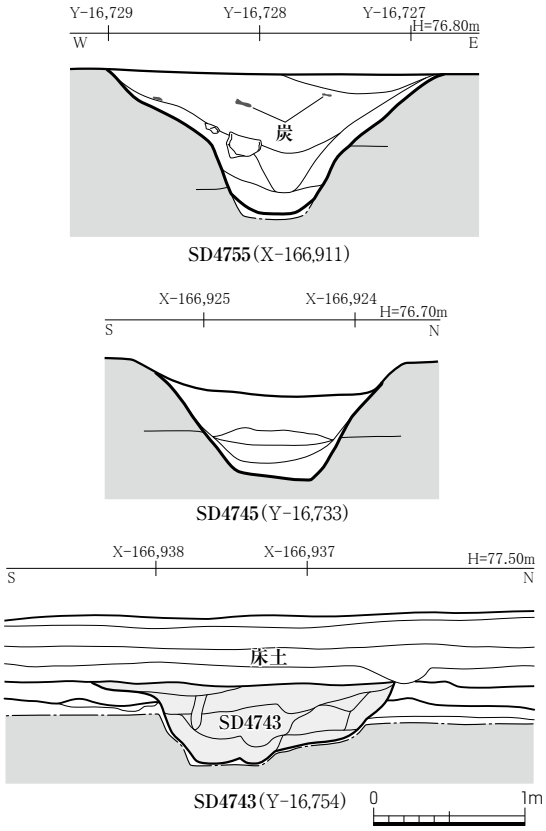


Fig. 68　SD4755・4745・4743断面図　1:50

東西溝SD4791　第47次調査区北端で検出した東西方向の素掘溝。西端は調査区外に延び、長さ9.5m分を確認した。北岸は調査区外にある。検出した幅は最大で1.1m、検出面からの深さは最大で90㎝を測る。遺構の重複関係があり、Ⅳ期の建物SB4787より新しい。埋土は下層が暗灰色粘質土、上層は黒褐色砂質土となる。法面が急で深い断面形状から、SD4755と一連の中世大溝であると考えられる。

東西溝SD4743（Fig. 68）　第50次調査西区から第46・47次調査区にかけて検出した東西方向の素掘溝。長さ18m分を確認し、西端は調査区外へ延びる。幅は1.4m、深さは検出面から50㎝である。14世紀後半の、土師器羽釜や瓦器などが出土した。SD4755などと一連の中世大溝であった可能性がある。

掘立柱建物SB5030　第50次調査西区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間の身舎の北に、１間の廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行6.3m×梁行3.4m、廂の出は1.0mである。柱間寸法は桁行で2.1m、梁行は1.7mである。柱穴は50～70㎝の円形または楕円形で、検出面からの深さは20㎝、埋土に石や瓦が交じる。建物の方位は東で南へ1.2°振れる。南側柱列中央やや内側に、土器埋納坑SJ5029がある。

土器埋納坑SJ5029　SB5030南側柱列中央やや内側に位置する土坑。平面は径35㎝の円形を呈する。13世紀後半の土師器小皿が複数枚出土した。

東西塀SA5032　第50次調査西区、SB5030の北側で検出した東西方向の掘立柱塀。２間、長さ4.6mを確認した。柱間寸法は2.3m。柱穴は円形または不整方形で、大きさは50～80㎝。柱筋の振れはない。

土坑SK4796　第47次調査区から第50次調査西区にかけて検出した、南北に長い溝状の土坑。西肩は直線状に延びるが、東肩は蛇行する。幅は最も広いところで3.4m、長さ11.4m、検出面からの深さ50㎝。遺構の重複関係より、Ⅲ-Ｃ期の建物SB4800より新しく、井戸SE5022より古い。埋土から７世紀末の軒丸瓦、開元通寶、瓦器が出土している。

土坑SK5004　第50次調査西区で検出した、東西に長い溝状の土坑。幅2.7m、長さ11m。細長い楕円形で、途中がくびれたような形状を呈する。検出面からの深さは15～30㎝。底面は凹凸があり、また小穴も複数検出している。13世紀末の瓦器が出土した。

土器埋納坑SJ5007　SK5004北肩に位置する土坑。一辺30㎝の隅丸方形で、深さ10㎝。13世紀後半の土師器小皿が約15枚出土した。SK5004より古い。

掘立柱建物SB4736　第47次調査区で検出した、総柱の掘立柱東西棟建物。桁行２間×梁行２間、建物の規模は桁行6.2m×梁行4.2m。柱間寸法は桁行で3.1m、梁行で2.1mである。柱穴は40～70㎝の隅丸方形で、深さは検出面から25㎝以上。建物の方位に振れはない。

掘立柱建物SB4988　第46次調査区から第50次調査西区にかけて検出した、桁行２間×梁行１間の掘立柱東西棟建物。建物の規模は桁行4.5m×梁行2.6m、柱間寸法は桁行が2.25mである。柱穴は40～70㎝の隅丸方形。建物の方位は東で南へ7.2°振れる。

南北塀SA4986　第50次調査西区で検出した南北方向の掘立柱塀。３間、長さ4.95mを確認した。柱間寸法は1.65m。柱穴は隅丸方形で、大きさは60㎝、検出面からの深さは20㎝。柱筋は北で東に4.5°振れる。北から２基目の柱穴がⅢ-Ｂ期の建物SB5000の柱穴と重複しており、それより新しい。

e　その他の遺構（Pl. 2～5・7～9・11，Ph. 8・13・16・36・37・39～41・51）

調査区の西側では遺構が希薄になるが、素掘溝や掘立柱建物・塀、井戸を検出している。井戸SE4031・4177・4460・5060・5065・5076については475頁の別表１に概要を記す。

南北溝SD4141・東西溝SD5942　第45次調査中央区から第50次調査東区、第53次調査北区にかけて検出したＬ字形の素掘溝。西辺にあたる南北溝SD4141は長さ34mを確認した。幅は30～85㎝、検出面からの深さは16～50㎝。南に向かうにつれ深く幅広くなり、底の標高も低くなる。方位は北で東に1.0°振れ、東西大溝SD4130より北ではやや蛇行する。遺構の重複関係があり、Ⅲ-Ａ期の東西溝SD4132およびⅡ期の土坑SK4161より新しい。瓦器が出土した。南辺にあたる東西溝SD5942は長さ21.8mを確認した。これまでは第53次調査北区で検出したSD5942は六条条間路北側溝SD4139の東側に連なる位置にあるが、南方へ曲がり、堆積土に瓦器を含むことから、SD4139とは一連のものではないと判断していた。しかし、東西溝SD4139のうち南北溝SD4131より東の部分は南北溝SD4141と一体として検出していることや、溝の深さや底の標高などから、SD4139の東側はSD5942と一連とみて、SD5942に含めた。幅は50～90㎝、深さは25～50㎝。西ほど深く幅広いが、底の標高は東の南北大溝SD4143西岸に向かうにつれ低くなる。方位は東で南に3.8°振れるが、東端5.3mは南へ大きく曲がり、この部分の溝埋土から瓦器が出土している。SD4141は南北溝SD4136の北延長線上に位置し、東西溝SD4137とSD5942の間は肩の間で2.2m、溝心で3.0m離れている。

南北溝SD4136・東西溝SD4137　第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した逆Ｌ字形の素掘溝。西辺にあたる南北溝SD4136は長さ８mを確認した。幅は最大で70㎝、検出面からの深さは最大27㎝で、底の標高は北に向かうにつれ低くなる。北端でSD4137の西端に接続する。方位は北で東に2.6°振れる。北辺にあたる東西溝SD4137は長さ15.5mを確認した。幅は50～90㎝、深さは20～25㎝、底の標高は東に向うにつれ低くなる。方位は東で南に1.5°振

れる。遺構の重複関係があり、SD4136はⅢ-A期の東西溝SD4119より新しく、SD4137はⅢ-C期の南北塀SA4110・4120より新しい。

東西溝SD4138　第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した東西方向の素掘溝。『藤原概報16』ではSD4141と一連としていたが、別の溝と判断した。長さ10m分を確認した。幅は50～60㎝、検出面からの深さは12～15㎝。方位は東で南に2.0°振れる。

掘立柱建物SB5925　第53次調査北区で検出した掘立柱南北棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行3.7m×梁行3.5mである。柱間寸法は桁行で1.7～2.0m、梁行は1.75mである。柱穴は大きさ30～50㎝の円形または隅丸方形、検出面からの深さは20～30㎝を測る。４基の柱穴で底部に15㎝前後の礫を検出しており、特に西辺中央の柱穴には複数の礫が詰まる。建物の方位は北で東へ11.4°振れる。

土坑SK5930　第53次調査北区で検出した円形土坑。直径1.0m、検出面からの深さ40㎝を測る。埋土から11世紀初頭の土器が出土した。

南北塀SA4120　第45次調査中央区で検出した南北方向の掘立柱塀。３間分、6.3mを確認した。柱間寸法は2.1m、柱穴は50㎝の隅丸方形で、検出面からの深さは30㎝程度。柱筋は北で東に5.0°振れる。Ⅲ-A期のSD4119およびⅣ期のSD4137と重複関係があり、それより新しい。

東西塀SA5094　第45次調査中央区から第50次調査東区にかけて検出した東西方向の掘立柱塀。２間、長さ4.0mを確認した。柱間寸法は2.0m、柱穴は30㎝の円形を呈する。柱筋は東で南に6.6°振れる。

南北塀SA5088　第50次調査東区で検出した南北方向の掘立柱塀。４間、長さ7.5mを確認した。柱間寸法は1.88m、柱穴は60㎝の円形で、検出面からの深さは10㎝程度とごく浅くしか残らない。柱筋は北で東に7.5°振れる。

東西塀SA5071・南北塀SA5072　第50次調査東区で検出した、L字形をなす掘立柱塀。南辺にあたる東西塀SA5071は、４間分8.9mを確認した。柱間寸法は2.23m。柱穴は15～20㎝の円形または隅丸方形。柱筋は東で南に6.8°振れる。西辺にあたるSA5072は、３間分6.5mを確認した。柱間寸法は2.17m。柱穴は15～20㎝の円形または隅丸方形。柱筋は北で東に13.3°振れる。

井戸SE5940（Fig. 69）　第53次調査北区で検出した井戸。南北大溝SD4143が最終的に埋没した後に掘削している。掘方は一辺1.0mの方形で、深さ1.5m。井戸枠は一辺0.5mの方形縦板組で、各辺にそれぞれ２枚の縦板を組む。縦板は幅20～30㎝、厚さ２～３㎝、底部付近に横桟が一段残る。12世紀の土器が出土した。

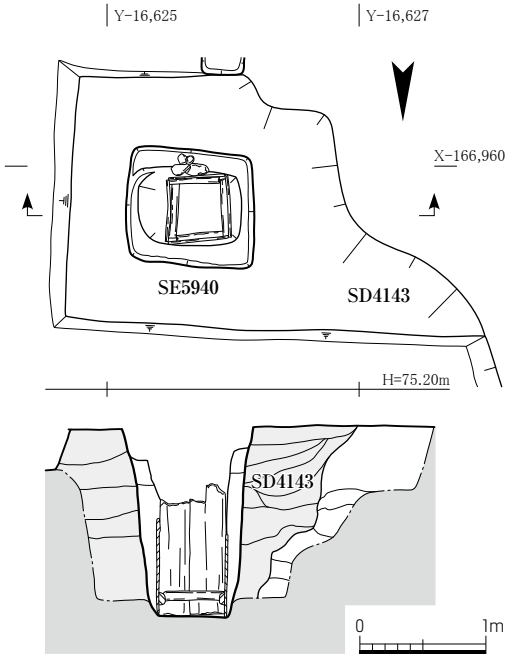


Fig. 69　SE5940平面図・断面図　1:60

掘立柱建物SB5070　第50次調査東区で検出した掘立柱南北棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行4.0ｍ×梁行3.6ｍ。柱間寸法は桁行で2.0ｍ、梁行で1.8ｍである。柱穴は40～75㎝の隅丸方形または円形。検出面からの深さは25～35㎝、北東隅と南西隅の柱穴には柱痕跡が残る。建物の方位は北で東へ1.0°振れる。

掘立柱建物SB5955　第53次調査中区で検出した掘立柱南北棟建物。桁行３間×梁行１間、建物規模は桁行5.0ｍ×梁行2.1ｍ。桁行の柱間寸法は1.67ｍ。柱穴は15～30㎝の隅丸方形または円形で、検出面からの深さは30㎝を測る。建物の方位に振れはない。

東西塀SA5075　第50次調査東区で検出した東西方向の掘立柱塀。４間、長さ7.5ｍを確認した。柱間寸法は1.88ｍ。柱穴は隅丸方形または円形で、大きさは30～65㎝、検出面からの深さは20㎝。柱筋は東で南に4.3°振れる。

掘立柱建物SB5971　第53次調査中区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間の身舎の北に廂が付く。建物規模は身舎部分が桁行6.3ｍ×梁行4.2ｍ、廂の出は1.4ｍである。柱間寸法は桁行で2.1ｍ、梁行は2.1ｍである。柱穴は大きさ20～30㎝の円形または隅丸方形、検出面からの深さは15～20㎝を測る。２基の柱穴で柱痕跡を確認した。建物の方位は東で南へ3.2°振れる。

掘立柱建物SB5965　第53次調査中区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行１間×梁行１間、建物規模は桁行3.4ｍ×梁行2.6ｍ。柱穴は25㎝の隅丸方形で、検出面からの深さは20㎝を測る。建物の方位は東で南へ3.5°振れる。

掘立柱建物SB4402　第46次調査区で検出した掘立柱東西棟建物。桁行３間×梁行２間、建物規模は桁行6.0ｍ×梁行4.0ｍ。柱間寸法は桁行、梁行ともに2.0ｍである。柱穴は25～30㎝の円形で、検出面からの深さは北側柱筋が30㎝、西妻柱は10㎝を測る。建物の方位は東で南へ7.0°振れる。北西隅の柱穴が、Ⅲ-Ｃ期の建物SB4331の柱穴と重複関係があり、それより新しい。

掘立柱建物SB4401　第46次調査区南端で検出した掘立柱東西棟建物。桁行２間×梁行２間、建物規模は桁行5.0ｍ×梁行3.8ｍ。柱間寸法は桁行で2.5ｍ、梁行で1.9ｍである。柱穴の平面は20～30㎝の円形。建物の方位は東で南へ3.4°振れる。

東西小溝SD4182　第45次調査中央区で検出した東西方向の耕作溝。幅20㎝ほどの素掘小溝で、長さ11ｍを確認した。溝埋土からウシ歯片などが出土した。

小土坑SK4061　第46次調査区の北東で検出した小土坑。長径38㎝の不整形な楕円形を呈する。埋土からウマ上顎歯、哺乳類種不明歯骨破片が出土した。位置はこの地区の中心的建物SB4420あるいはSB4421と重複する位置にあり、SB4420であれば南廂部にあたる。

南北溝SD4832　第47次調査区北西隅で検出したＬ字形の素掘溝。西辺にあたる南北溝は長さ７ｍ分を検出している。幅は50～80㎝。北端は調査区外へ延び、南端で東に折れる。方位は北で東に3.0°振れる。南辺にあたる東西溝は長さ1.5ｍ、幅は80㎝。深さは検出面から10～15㎝ほどと浅い。南北溝の埋土からウシ歯片、哺乳類種不明歯片が出土した。

土坑SK5015（Fig. 70）　第47次調査区から第50次調査西区にかけて検出した、大規模な土坑。南北8.0ｍ、東西7.0ｍで、平面形状は北半分が楕円形、南半分は二股に分かれる。底面は10㎝程度の凹凸はあるものの比較的平旦で、検出面からの深さは55㎝を測る。土坑の肩には暗灰色の粗砂と粘質土が断面三角形に堆積している。下層の埋土は厚さ30㎝ほどで、暗灰色の粘質土

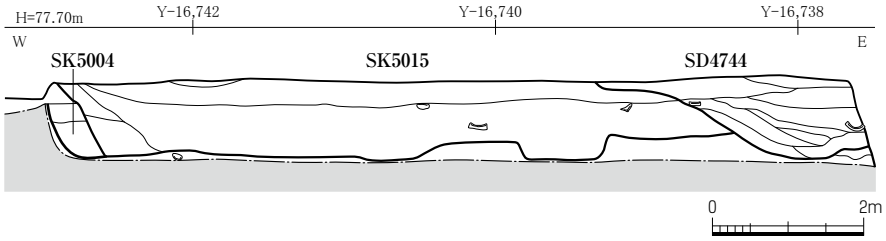


Fig. 70　SK5015断面図（X-166,929）　1:50

である。上層は褐色微砂塊交じりの暗灰褐色砂質土で、最終的な埋め立て土とみられる。遺構の重複関係があり、土坑SK5004より新しく、中世の大溝SD4744より古い。中世の軒瓦や丸瓦、および各種の道具瓦が出土した。

土坑SK4982　SK5015の内部で検出した浅い土坑。南北1.6m、東西1.4mの不整形を呈し、深さはSK5015の底から30cmを測る。SD4130の埋土を掘り込む。埋土は淡褐色粘土塊交じりの暗青灰色粘土に木屑を含み、マツ属の毬果が出土した。

土坑SK5078　第50次調査東区で検出した南北に長い溝状の土坑。幅0.7m、長さ2.1m、深さは検出面から25cmを測る。埋土からスッポン背甲骨板とヒト歯が出土した。

土坑SK5941　第53次調査北区で検出した、南北大溝SD4143西岸部に掘られた土坑。長径2m、短径1.2mの不整形な楕円形を呈する。埋土から土師器、瓦器、瓦が出土した。

1）玉田芳英2005「香久山のふもと」『明日香文化財論攷―納谷守幸氏追悼論文集』納谷守幸氏追悼論文集刊行会。

2）有効数字は小数点以下一位までの表示を原則としたが、柱間寸法では、それによらない場合もある。